

GATE 一自衛隊特殊部隊
『嵐』隊長、彼の地にて
斯く戦えり—

ならや

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自衛隊特殊部隊『嵐』の隊長である佐藤峯一（さとうみねいち）は伊丹と共に銀座事件に遭遇し、その縁で特地方面部隊に参加する事になった

世界最強の兵士と呼ばれる男の特地での戦いが始まる

GATEネタの小説が書きたかったので書き始めました

メタルギア、エスコン、相棒等々のネタが出てきます

主人公はチートレベルです

イメージとしてはメタルギアのスネーク的な

その点ご了承ください

12/20 タグにライブ追加しました

キャラクターのみ登場予定

12/21 タグにルーントルーパーズを追加しました

12/25 タイトルを変更

2/21 タグにガンダムを追加

目次

接触編

銀座事件	1
GATEの向こうへ	6
偵察部隊の道中	11
コダ村とドラゴン	16
生存者	21
派遣と反乱	28
反乱の終息	37
再訪のコダ村	44
レレイ	49
炎龍、再び	54
イタリカ	61

精銳、到着	66
イタリカ防衛戦	71
拘束と奪還	76
皇女、日本へ	80
会談と強襲	85
脱出、合流	92
出会い	97
首脳達	103
旅館	108
嵐、集結	112
主人公紹介（後日追加あり）	117
進撃の中北韓特殊部隊	122
宿からの逃走	127

東京湾事件	133
因縁	136
亜門羅刹	140
ルーントルーパーズ編	
始まりの航海	146
飛べ、久世小隊	157
突撃（1回目）	165
嵐 部隊詳細（後日追加、修正あり）	170
突撃（2回目）	175
洋上の無双と車列の秘密	184
決着と交渉と	195
最後の希望	204

佐藤大和と言う男	208
諦めぬ者達	214
諦めぬ者達の奇跡	220
戦後処理と探し人	225
幻想郷	233
最悪の顔色と協力者	239
新たな家族	245
厳しい新人研修	254
リヒャルダと詩織と	259

接触編

銀座事件

「いやー久々に銀座に来たな」

「そう思つて誘つたんですよ」

「ま、調査もあるんだけどな」

頭を掻きながらそう言う男佐藤峯一とノリノリの男伊丹耀司は、二人で銀座に来ていた

理由は伊丹が誘つて、佐藤も少し仕事の用があるという事で来たのだ

「でどこに行くんだ？」

「取り敢えずゆりかもめに乗り損ねたんで待ちましよう」

「で、同人誌即売会に行く」と

「わかつてんじやないですか？」

そんな会話をしている時だった

「——なんだ？」

「え？」

佐藤はその場の空気が変わった事に感づいた
そしてその時に響いた悲鳴と共に走り出した

「なんだこれは!？」

「佐藤さん!何が……っ!？」

二人の目線の先には竜の姿があつた

その下では警官が銃を撃っていた

「くそっ!」

その警官に斬りかかろうとしていた敵の兵士を伊丹がCQCで倒し、持っていた短刀で首を斬り仕留める

「この野郎!」

敵が伊丹に斬りかかる

咄嗟に佐藤は持っていたM1911コルトガバメントを腰から抜き、射撃した

「助かりました佐藤さん」

「いいさ、これを」

警官が使っていたニューナンプを渡す

警官には皇居に市民を避難させるように指示していた

「どうします、佐藤さん」

「…… お前は皇居に行け」

パツと伊丹がこちらを見た

「佐藤さんは？」

「殿を勤めるさ」

「な!? 無茶言わんでくださいよ!」

伊丹が言うのも無理は無い

「大丈夫だ、直ぐに行く」

「…… わかりました、直ぐに来てくださいよ」

そう言つて走り出した伊丹の背中を見送り、正面を見ると1000人程の敵兵がいた

「さて、やろうじやないか」

ガバメントを撃ち始めた

「佐藤さん遅いな……」

皇居の門に展開する近衛と称される第一機動隊の後方で伊丹はつぶやく

「隊長! 正面に人が「佐藤さん!」 えっ?」

機動隊員が間拔けな声を出す

隊員が言った人間は佐藤だった

「遅いですよ佐藤さん」

「いやー思ったより敵が多くてねー」

ポカンと口を開ける機動隊隊員達

何せ衣服の破れもなく、返り血を浴びた様子もない

だが、手に持っているナイフは血まみれだったからだ

「で、何人くらいやったんですか」

「ざっと200人くらいじゃないか?」

そんな会話をしていると、自衛隊が到着した

「自衛隊員の方ですね?」

「そうだ、反撃か?」

「はい!これを!」

そう言つて渡されたのは89式小銃と弾薬だった

「あいよ、俺も手伝うよ」

「じゃ、私は帰らせてもらいま「帰らせねえよ!」ぐふっ!」

帰ろうとした伊丹の首根っこを佐藤が掴む

「何でするか帰次帰りたいて言つたらぶちのめすからな」反撃に参加しますってか
させてくださいっ！」

そんなやり取りを聞いていた自衛隊員は苦笑いしながらも小銃の確認をしていた

「さて、行くぞ！」

「了解っ!!」

自衛隊の反撃が始まった

GATEの向こうへ

「はあああああああゝ」

「なんだそのため息は」

「結局、夏の同人誌即売会は中止ですし、めんどくさい表彰式まで出るはめになっちゃったらこのくらいのため息出ますよゝ」

「同人誌即売会は知らんが、表彰式がめんどくさいのは同感だな」

すると伊丹が珍しい物を見たかのような目を向けてきた

「珍しいですね、佐藤さんがめんどくさがるなんて」

「市民を守って当然の自衛隊員が、市民を守って表彰なんておかしいだろ」

「真面目解答ですねー」

「早く帰って、ラノベ読みたいなあ」

「そうですよね!!俺も同人誌読みたいです!!」

そんな話をしていると

「あの、式が始まるのですが……」

ふと振り替えると、話を遮ると悪いと思ったのか申し訳なさそうに声をかけてきた男

がいた

それを見た俺たちは

「行くか」

「めんどくさいけど、行きましょう」

部屋を後にした

式が終わって

「はああああああくよく終わった〜」

「伊丹、このあと新装備の確認があるってよ」

「そんなバナナ!!」

ガンという擬音出そうなレベルでショックを受けた伊丹を引っ張って駐屯地へと戻って武器倉庫に向かう

「伊丹二尉、佐藤一尉、新型の戦闘服です」

ダンボールを持ちながらそう言うのは富田である

「あれ？なんで新型の戦闘服が？北海道方面優先じゃないの？」

率直に疑問をぶつける伊丹にたいして富田は

「たぶん、そう言う事だと」

そう答えた

「なるほど、そう言う事か」

この場でそう言う事が良くわかっていない……というかわかりたくないのは伊丹だけだった

数日後

完全武装した兵士達や装甲車、戦車や車両が銀座に現れた門の前に整列していた

もちろんその中に伊丹と佐藤の姿もあった

数日前に言っていた『そう言う事』というのは自衛隊特地派遣部隊になる、という事だった

出発式の後、74式戦車を先頭に門の中に入って行く

七四式戦車は既に旧式で廃棄が決まっていたが、武器を捨てる事が予想される特地に90式戦車のような高価な武装を持っていく事は出来ず、捨てるも惜しくない廃棄予定か、既に廃棄済みの武装を集めたのだ

小銃は64式小銃、これも同様の理由で装備されている

その他の装備も旧式ばかりで、ひどい物では骨董品とまで称される武装もあつた
「しかし、今さら64式を使うとはな」

「ああ、そう言えば佐藤さんMP5かM4でしたもんね」

「特殊作戦に対応しやすいからな」

普通科連隊、発進だ!!という狭間中将の声が聞こえたので高機動車に乗り込む

運転は伊丹、佐藤は助手席に乗り込む

「門の中って、こうなってるんだな」

「そうですね、なんかトンネル見たいです」

門を抜けた先は夜だった

そして74式が既に展開していた

「早速戦闘かよー！」

そう言いつつも暗視装置を下げる佐藤

74式が睨んでいたのは、銀座事件時に見られた兵士やオーク等の怪物達だった
「全員、射撃開始!!」

そう狭間中将の声が無線から流れたとほぼ同時に74式の主砲が火を吹いた

74式から発射された榴弾の炸裂とともに普通科連隊の隊員達が射撃を開始した
GATEの向こうでの初の戦闘の火蓋が切って落とされた

偵察部隊の道中

「敵襲!!」

敵襲を知らせるサイレンの数十分後には自衛隊員達が振り分けられた掩体へと飛び込み小銃を構える

「地面が三分、敵が七分、地面が三分に敵が七分だ!」

そんな声が無線機から聞こえる

「クソツ、まだ攻めて来るのかよ!」

小銃を構えながらそんな事を言うのは佐藤である

もちろん無線機には聞こえないようにしている

「まだだ……焦るなよ……まだ撃つなよ……」

そんな声が聞こえてくる

別に、焦っている訳ではない、なにせこれが初めてではないからだ

もちろん慣れた訳でもないが

と、その時迫撃砲から照明弾が次々打ち上げられる

その照明弾によって地面から押し寄せてくる敵の姿がハッキリと浮かび上がる

それによつて射撃に適した状況になった

「撃てえ!!」

その号令に弾かれたように射撃を開始する
アルヌス防衛戦の火蓋が切つて落とされた

「敵さん、これだけの兵力を失つてどうするつもりでしょうね」

「わからんな。ただ、大打撃だろうな」

佐藤と伊丹は会話しながら今回の防衛戦で倒れた敵兵士の数を調査していた

その後、アルヌス駐屯地へと戻ると偵察部隊を派遣する事が伝えられた

理由は、OH1偵察ヘリから得られた情報によつてアルヌス周辺の地図はほぼ完成していたが、地元住民の生活スタイル、文化等の情報がほとんど何も無い

そのため、町や住民の文化の調査、地図の確認等も含めて偵察部隊を派遣する事が決まったのだ

それを聞いた伊丹と佐藤は

「それが良いかもしれませんねえ」

「それが良いと思いますよ？」

と他人事の様子に言い放った伊丹と佐藤に対して上官はワナワナと震えながら部下に言った

「良いかもしれませんがねえ、じゃない。君たちが行くんだぞ」

「え？」

「は？」

そんな声を出す部下に対して、怒りを抑えてプルプル震える上官を攻められる者は居ないだろう

「良い天気ですねぇ」

「そうだな」

先頭に行く高機動車の助手席に座る伊丹とその後ろに座る佐藤は、そんな気の抜けた会話をしていた

「しっかし隊長、自分はてつきり木が歩いたりしてるもんだと思いましたよ」

そんな事をぼやくのは倉田である

「流石にそんなことは無いだろ。おやつさん、後方車両に連絡して異常無いか確認してくれる?」

「了解です隊長」

直ぐにおやつさんは各車に連絡を取り始める

その無線を受けた栗林は無線から聞こえてくる佐藤と伊丹の会話に不安を覚えていた

「伊丹二尉と佐藤一尉が隊長と副隊長で大丈夫かなあ」

それを聞いていた富田は答えた

「大丈夫ですよ。二人とも二重橋の防衛戦で活躍しますし、佐藤さんに至っては数百のぼる敵兵士を拳銃一丁とナイフのみで倒しますから」

それを聞いた栗林は信じられないと言う顔をした

「え？マジ？嘘でしょ？」

「まあ、隊長と佐藤さんは信じてても良いと思いますよ？」

「信じられないけど、そうっぽいねえ」

栗林は窓から空を見上げていた

コダ村とドラゴン

「平和だねえ、空も青いし」

「こんな空なら北海道にもありますよ。佐藤さんは何を？」

「音楽聞いてんだよ」

「戦場で音楽聞く人始めてみました……」

「そら、佐藤さんだから」

そんな会話をするのは運転席の倉田と助手席の伊丹、その会話のネタにされていたのは佐藤である

「あ、隊長！村が見えますよ」

「佐藤さ〜ん！」

「わーつてるよ。おやつさんは継続車両に村に向かう事を伝えてくれ」

「了解です」

「佐藤さん、あの村何か面倒事起きませんかね？」

「んなこと知るか。警戒しといた方が良くも知れないが、いきなり戦闘になる事は無いと思うぞ」

「それもそうですね」

そう言った伊丹と佐藤であったが行く手にある村に視線を向けたまま、手にはしつかり六四式小銃が握られていた

その問題の村に入った伊丹達第三偵察隊だったが、はつきり言って警戒の必要はなかった

村に入るなり、子供達がよつてたかつて来てそれにつられた大人達も第三偵察隊の面々と会話をして、一種の交流会の用になっていた

「あなた、村長？」

伊丹は片言の特地語で村長らしき人物に声をかける

「そうじゃが…… どうかしたか？」

どうやら伊丹の予想は当たった様である

「この先の、情報、欲しい」

「良いが、ここだと説明しづらいからこつちへ」

そう言った村長に連れられて伊丹は車列から離れていった

「倉田、この先に川が見えるらしいからその川に沿って進め」

「了解つすおやつさん」

情報通り川が見えて来た、その先に森があることも情報にあった
しかし

「隊長、あの森…… 燃えていますよ！」

「倉田、車止めろ。おやつさん車列に停止を伝えて」

「了解!!」

一行は車を一旦止めて、ゆっくりと進み出して高台へと向かった

そこから見えたのは、口から火を吹く竜であつた

「一本首のキングギドラか？」

「古いなあおやつさん、あればエンシェントドラゴンつすよ」

そんな話をしていると栗林が来て

「伊丹二尉、あれ、どうします？」

「栗林ちゃんさ、あのドラゴンに何も無い森を焼く習性があると思う？」

「さあ？自分には分かりません。ドラゴンの習性に興味があるのならばご自分で調べて

はどうですか？」

「いや、そう言う事じゃなくてね？」

「??」

栗林はただ首をかしげた

「コダ村の村長からの情報だと森の中に村があるらしいんだよね」

それを聞いた栗林はハツとしたのか火の手が上がっている方を見た

「なるほど。ドラゴンは村を焼いてんじゃないかって事か……だとしたら不味いな」

伊丹も同様の意見だったのかうなずく

「ええ、どうします?」

「隊長のお前が決めるよ」

ええくと言いつつ頭をかいてから大声で言った

「火が消えたら森の中に入るぞ!準備と警戒を怠るな!」

「了解!!」

隊長の命令を受けた隊員達は野宿の準備を始めていた

数人は警戒に当たっている

「勝本、キャリパーで警戒しといてくれ」

「了解!」

勝本は軽装甲車の天井に設置されたキャリパー……もといM2重機関銃に就いた

「ドラゴンと戦うのは自衛隊の宿命なのか?」

そう呟いた佐藤は、自分も警戒する事にした

口元は笑っていたが目は笑っていなかった

生存者

「佐藤さん、森の中に入りましょう。火も消えたんで」

「そうだな、入ろう」

結局、火が消えたのは翌日の事だった

木から木へと火が広がって、消えるのはまだまだ時間がかかると思われたが運良く雨が降り、火を消してくれたのだ

「こんなときに雨が降るなんて、運が良いっぽいっすね」

「ドラゴンが飛んでった上昇気流でほら、なんかね、こう、雨が降りやすいんじゃない？」

「大分雑な説明っすね」

伊丹の雑な説明を受けたのは倉田

「佐藤さん、何か知らないですか？」

「分かるわけねえだろ」

伊丹からヘルプを求められたが、バツサリと切り捨てた佐藤

この三人で森の中に入って行く事になった

他の隊員は野営地の片付けとドラゴンが戻ってこないか警戒する事になっている

三人は会話（真面目な会話ではない）を交わしながら森の中に消えていった

「こちら佐藤、片付けが終わってたらこっちに来てくれ」

『了解、ではそちらに向かいます』

道中は特に何も無かった

オークが襲つてくるとか、帝国兵の襲撃とか、ドラゴンが戻ってきて戦うとか、そんなのも一切無く森は不気味な程に静かだった

三人の目の前に広がるのは村のあつた跡だった

その跡地を搜索していると倉田が何かを見つけて顔をしかめた

「隊長、あれって「言うなよ」………了解つす」

「ドラゴンの威力は凄いな」

「そうですね、空自のファントムで何とかしてもらえないですかね」

人だった物や何やらがそこら辺にある

倉田は既にグロッキー状態だった

そんな所に偵察隊が来て伊丹に指示をおおぐ

「勝本、おやっさん、富田は反時計回りで村を回って。栗林、倉田、佐藤さん、時計回りに村を回って探しましよ」

「探すって、何を？」

栗林からの質問に頭を掻きながら伊丹は

「生存者かな？」

と答えた

「居ないですね、生存者」

「この状況だ、居たら奇跡だぞ？」

二人は座つた状態で栗林からの被害状況を聞いた

他の隊員達は遺体の埋葬を行っている

伊丹は自分の持つている水筒の中身が少なくなっている事に気付き、井戸が無いか見

渡した

「…… 伊丹、もしかして井戸を探してるのか？」

「そうです、どっかにあります？」

「お前が座つてるのがそうだよ」

佐藤に指摘されて伊丹は初めて自分が座つていたのが井戸だと気付いた

近くにあつた桶を放り込んだ

ヒューーコーン

「「え？」」

近くにいた栗林、佐藤、伊丹の視線が井戸に集まつた

水に物が落ちたら、普通はポチャンとか、バシヤツとかそういう音がするの、コーン

ンと言う音が聞こえてきたからだ

恐る恐る三人が井戸を覗くと、そこには金髪の少女がタンコブを作つて浮いていた

「くう~~~~~！隊長！エルフっすよ！！本物のエルフっすよ！！」

興奮した倉田が声を高くして叫んでいるのに呆れつつ、伊丹は声をかけた

「お前、エルフ萌えか？」

「違うっすよ隊長、自分は猫耳が良いっすけどエルフが居るんなら猫耳が居る可能性もあるじゃないですか！」

「わーっただわーっただ、もう良いから」

「しかし、よく生きてたな、あの少女」

そんな二人の元に女性自衛官が来た

敬礼をされたので、二人は返礼をする

しかし、伊丹は見上げる形になってしまう

女性自衛官こと黒川は、身長が高いから平均より少し低い伊丹だと見上げる形になるのだ

何とか身長を誤魔化して入った栗林と、身長が問題ない黒川、二人は凹凸WACと言われている

そんな黒川は看護師としての資格も持っているので保護したエルフの少女の様子を見ていた

「バイタル等は安定しています。人間なら、ですが。さすがに、エルフのバイタル等は分かりませんから」

「だろうな、エルフの平均は分からないが人間の平均からすると安定しているって事か」
「ええ、そうですね。それと、この少女どうします?」

「ここに置いていくのも可哀想だし、連れ回すのも可哀想だから、一旦駐屯地に戻るか」
それを聞いた黒川は、ニッコリ笑った

「二尉なら、そうおっしゃると思っていましたわ」
「それって、俺が優しいから?」

「二尉が特殊な趣味をお持ちだからとか、少女に興味がありそうだからとか、そう言う理由を言うのは失礼だと思いますが?」

そう言われた伊丹は、苦笑いしかできなかつた

黒川は、結構毒舌であり、たとえ上官でもはつきりと物事を言える

「ま、とりあえず駐屯地に戻りましょ」

「倉田、運転頼むぞ。コダ村を通っていくぞ」

やる気の無い伊丹に替わって佐藤が部隊に指示を出していた

10分後、部隊は森を後にする

少女を乗せて

派遣と反乱

「つまり、アメリカは海兵隊、イギリス、ロシアは陸軍を派遣する用意があるか？」

本位総理大臣は部下からの報告書を見ながら質問した

それに部下は答えた

「はい。アメリカは海兵隊歩兵部隊だけでなく、戦車隊、砲兵隊、航空隊も派遣できるそうです。ロシア、イギリスも歩兵部隊の他、戦車隊までならば派遣できると」

「しかし、移動にかかる費用は？」

「アメリカは在日部隊を中心に派遣、費用は全額負担するとの事です。ロシア、イギリスも同様に費用を全額負担すると言っております」

「なるほど、こちらがやらなければならぬことは？」

「移動に使う道路、空港、港などの確保はお願いしたいと言っていましたから、それだけで良いと思います」

「なるほど、面倒なのは二枚目の方か？」

そう言って本位は報告書をめくった

内容は中北韓の工作員について

そこには海上保安庁、海上自衛隊などからの報告が書かれていた

「はい、海保、海自共に不審船を発見、確保しました。中からは多数の武器が発見されました」

本位は三枚目の報告書を見た

そこには押収された武器が並べられていた

なぜか旧式の武器ばかりであった

「…………… 奴らは何を考えてるんだ？こんな旧式ばかりで」

「分かりませんが、特戦群をなめてるとしか思えません」

はあと溜め息を一つついてから本位は部下に命令した

「アメリカ、イギリスに特地向への派遣を要請してくれ。アメリカには歩兵部隊、戦車隊、航空隊の派遣もだ。あと、三国に特殊部隊派遣要請をしといてくれ。特戦群の出動もあり得るからその点の準備もだ」

「分かりました」

向きをくるりと変えて出ていった部下を見て、閣僚や他の部下もこのくらい優秀だったらなあ、と思つた本位だった

そしてその数時間後、アメリカのデイレル大頭領、ロシアのジエガノフ大頭領、イギリスのブレックス大頭領にこの『要請』が届いた

アメリカ

「大頭領、日本政府から派遣要請です」

「ようやくか」

デイレル大頭領は安心したかのように息をつくくと、部下からの報告を聞いた

「戦車隊、航空隊はどのような編成になる？」

「戦車はM60、航空機はF111、A10、AV80ハリヤーを配備、歩兵隊にはハン
ヴィー、M113、M16等を配備した特地派遣旅団を編成中です」

「派遣要請のあった特殊部隊はどうする？」

「特殊部隊はNavy SEALsチーム5、CIAのエージェントとコンバットチー

ムの投入を考えてます」

満足そうにうなずいたデイレルは部下に資料を返して命令した

「よろしい、その内容でやってくれ。あと、モトイと電話会談をしたい」

「会談でしたら、日本側からも要請がありましたので、5時間後に行う予定でセットしてよろしいでしょうか」

「ああ、それで良い」

部下は大頭領執務室から出ると、いそいそと準備に取りかかった

なお、イギリスとロシアの反応も概ね変わらず、要請に対して両大頭領はゴーサインを出した

すこしばかり時間がたつて本位とデイレルの電話会談である

「デイレル、すまないな。海兵隊の派遣を要請して」

「何、遠慮することは無い。モトイと私の仲じゃないか」

実はこの二人、双方が国のトップになる前からの親友で、よく二人で酒を飲んでいた。しかし、モトイも大変だな。中北韓が何かしてるんだろ？」

「ああ、三国の特殊部隊が動き出してる。それ以外にも北の戦闘機5機が防空識別圏に侵入してきたからF4ファントムが撃墜した。中国に至っては艦隊が出航準備をしてるって情報もある」

「そうか、領海に入ったりして戦闘体勢になったら教えてくれ。日米同盟に従って我が国も戦闘体勢に入る」

「それはありがたいな「総理、台湾からの緊急情報です」…… デイレル、日米同盟を発動させるべき事態が起きた」

「何？」

そう言うのと本位は一区切りしてから言った

「台湾海軍からの情報で中国海軍の空母遼寧が動き出したらしい。揚陸艦長白山も遼寧と共に艦隊を組んでいて、このまま進むと領海侵犯まで2日だ」

「台湾海軍は何をしていたんだ？」

「台湾海軍も気付いていたんだが、圧倒的な戦力差のせいで手出しが出来なかったそう。ただ艦隊を追跡しているから攻撃するならば手伝うとのことだ」

本位の情報を聞いて中国を忌々しく思ったデイルルは大きく溜め息をついてから対応を話した

「わがアメリカ第7艦隊を動かす。海自は動かせるか？」

「ああ、いずも型護衛艦を有する第五護衛群に出動を命じた。空自にもF15、F4、F2の出動させることにした」

「わかった、中国が退いてくれる事を願うとしよう」

「そうだな」

「世界の平和を祈って」

その言葉で会談は終わった

その数時間後、アメリカ第7艦隊と第四護衛群が洋上に展開、その上空にはアメリカ空軍のF15、F16と空自のF4、F15、F2、F35が翼を翻していた

海中にもおやしお型潜水艦、ヴァージニア級、シーウルフ級潜水艦が居た

また、やまと型原子力潜水艦が当該海域に急行していた

対する中国艦隊も戦闘体勢に入り、遼寧艦載機を対空装備で甲板上に待機、一部の機体は発進状態になっていた

日本、アメリカ両政府は中国政府に対して『日本領海に艦隊が侵入すれば両国への宣戦布告と取り、この艦隊を排除する』という事実上の最終通告を出した

中国政府からは考える時間が欲しいと言われたので、二時間の時間が設けられた。そして中国政府が出した答えが日本、アメリカ両政府に伝えられる時間となった。中国政府が出した答えは

艦隊を撤退させる、だった

日本、アメリカ両政府はこの決断を喜んだ

しかし喜ばない者もいた

それは艦隊司令のウーフエイだった

「ここまで来て、我々に撤退しろと言うのか!!」

虎の子の空母遼寧まで出したにも関わらず、日本、アメリカ両政府からの圧力に屈して出された撤退命令を聞いたウーフエイは完全にキレていた

『そうだ、あれだけ準備万端で迎え撃たればこちらは何も出来ずに殲滅される。ならば後退するのが賢明であると国家主席は判断した』

「私は認めん!!日米ごとくに負けない!!これから前進する!!」

そう言つて無線を切ると、ウーフエイは艦隊に前進を命じたのだ

中国政府はすぐにこの事を日米に伝えた

「ガツテム!! 奴は一人で戦争を始めるつもりか!!」

「それで、我々日米政府への要請とは？」

『空母遼寧を含む艦隊を止めてほしい。方法は構わない。それが例え艦隊全艦の撃沈だったとしても』

「分かりました。その要請、引き受けます」

『すまない。よろしく頼む』

中国政府からの通信が切れると本位、デイレル共に自国の軍に命令を出しに向かった
中国反乱艦隊と日米合同艦隊との決戦が迫っていた

反乱の終息

「反乱か、面倒な事になったな……」

イージス艦、あおばのCICで呟く一人の男

少し楽しそうな表情をしている男、加藤はあおばの艦長である

数年前のアフリカ派遣に幕僚として参加した男である

当時の上官は海将で陸の基地の司令になり、自分は艦長になった

隣にはアメリカ海軍第7艦隊所属のタイコンデロガ級巡洋艦ヴェラガルフの姿があった

あおばの周囲にはあたご型イージス護衛艦みようこう、アーレイバーク級駆逐艦サンブロン、ジョンポールジョーンズが展開している

既に中国艦隊の司令官が国家に反乱を起こし、進撃を続けている事は展開している全員が知っている

すると加藤は思い出したかのように副長に確認する

「副長、やまとが来るのもうすぐだよね？」

「はい、そろそろです」

「わかった、準備しといて」

「艦長、そのやまとから通信で真横に浮上すると」

それを聞いた加藤はニヤリと笑った

海上自衛隊初の原子力潜水艦やまを見たかったからだ

その数十秒後、大型の潜水艦があおばの横に浮上した

CICのモニターで確認した加藤は一気にテンションが上がった

「おおっ！あれが我が海自の誇る潜水艦か！ちよつと行つてくるからよろしく副長」

「了解です艦長」

敬礼をした加藤はスキップで向かった

「加藤艦長ですか？」

「ええ、加藤です。あなたは？」

「これは失礼」

帽子を取った男に加藤は見覚えがあつた

リムパックでカールビンソンを5回仕留めた男

「やまとの艦長、海江田です。よろしく」

——この男が海江田か——

そう加藤は思った

海自始まって以来の天才、海江田

とりあえずその事は置いておいて命令書を渡す

「これが命令です」

「ありがとうございます、では」

敬礼をすると、海江田はやまとに戻っていった

名残惜しいが、加藤は自分もC I Cに戻ることにした

「艦長、戻りましたか」

「うん、戻ったよ」

「海江田艦長はどうでしたか？」

「…… 恐ろしく考えてることがわからなかったよ」

苦笑いしながらそう返す加藤

加藤達の任務は第7艦隊の空母ジェラルドRフォード級2番艦ジョンFケネディの
防衛である

ミサイルや航空機、潜水艦と言った脅威を未然に取り除き、航空隊に中国艦隊の攻撃
に集中してもらう為である

自分の上を航空機が飛んでいく

前線の部隊は既に戦闘に入っているらしい

「ま、僕には関係ないけどね」

そう割りきって自分の任務に集中する加藤だった

さて、その攻撃の標的にされた中国艦隊は大変な事になっていた

イージス艦が2隻しかないと、ミサイルや航空機への対応は遅れを取る

だが、イージス艦から得たデータを全艦に共有することで何とか凌ごうと考えた
だがそれも限界で既に飽和寸前である

遼寧艦載機も空自やアメリカ空軍をぶちのめすどころかぶちのめされている

中国艦隊はミサイルの雨を浴びることになった

「イ、イージス艦が!」「こちら広州!被弾した!イージスの機能はまだ大丈夫だ!」「こちら長白山!被弾、被弾!速度低下!大浸水だ!」「こちら広州!追加で2発命中!総員退艦する!」「こちら北京!本艦も4発食らって沈む!」「こちら長白山!総員退艦!退艦する!」「こちらミサイル艇部隊!ほぼ全滅だ!」

ミサイルの雨によってイージス艦広州、北京が撃沈され長白山も大浸水により沈んだ
ミサイル艇部隊も壊滅状態にある

この状況に艦隊司令のウーフェイは静かだった

その時乗艦している遼寧に大きな衝撃が走る

入ってきたのは悲報だった

「右舷に3発被弾!」「浸水が止まらない!」「傾斜5度を越えました!!」

そう部下が報告するとウーフェイは静かに言った

「どうやらここまでのようだ。総員退艦」

「り、了解!!総員退艦せよ!総員退艦せよ!」

部下はいそいそと艦橋から出ていく

だがウーフェイはイスに座ったままだった

午後3時39分、遼寧は右に大きく傾き、遂に転覆した

中国潜水艦隊はいまだ戦意を失っていないが、海江田の巧みな戦術に手も足も出
ずに全艦が撃沈された

その後直ぐに海自、アメリカ海軍は生存者の救助を開始した

中国艦隊は全滅、アメリカ海軍、空軍海自空自合同部隊の被害はほぼゼロだった
後に中国事変と呼ばれる事件は、幕を閉じた

再訪の coda 村

中国事変が起きてからというものの、中国は大変な事になっていた

日本に向けて艦隊を出航させた事により、国連常任理事国を追放されウーフェイに続けと言わんばかりに一部の将校、農村、自治区が次々と反乱を起こしたのだ

国内の不満が爆発した形となり、政府は対応に追われ尖閣諸島問題の解決を条件に日本に救援要請も出した

既にロシア軍、アメリカ軍、イギリス軍等が国連軍として治安維持活動を行っている
日本政府はアメリカ軍の後方支援を理由に自衛隊を派遣した

しかし規模が大きく、国連軍も手が足りなくなり、中国は周辺各国に救援要請を出すことになった

領土や島の受け渡し、金銭、技術提供と言った要求を飲んだ中国政府だったが反乱は収まるところを知らず、中国全土が戦乱に包まれる事態となった

こうして中国は落日を迎える事になった

それを本部からの通信で聞いた部隊は多かった

その部隊の中には伊丹達もいた

「中国ヤバイですねー」

「だな。反乱を起こした将校が核をぶっぱなさなければいいが」

「嫌な事言わんでくださいよ佐藤一尉……」

「まあ、そうなったら佐藤さんの部隊の出番ですね」

「佐藤一尉の原隊ってどこなんですか？」

「『嵐』って言ったらわかるか？」

ビックリしてアクセルを踏み込んだ倉田は悪くない

数年前に新設された自衛隊特殊部隊『嵐』

特戦群の更にも上を行くと言われスペツナツ、ネイビーシールズ、SASの更にも上を行く部隊

その実力は世界トップクラスと言われている

「あぶねえー！」

「グハッ!!」

「伊丹?!」

アクセルを踏み込んでしまい急ブレーキで一旦止まった倉田

その結果伊丹が顔をダッシュボードにぶつける事になった

「あ、二尉大丈夫ですか？」

「いててててて…… 何とかな」

「佐藤一尉、嵐の人だったんですね」

「倉田、佐藤さんは嵐の人じゃなくて隊長だ」

「フアツ!？」

「そうだが何か？」

そんなこんなあつて部隊は2回目のコダ村に着いたのだった

「大きな 鳥 居た 森 燃えた」

伊丹はコダ村の村長にイラストを書いて説明した

この手のイラストは得意なのでかなりうまく書けた

「これは…… 炎龍じゃよ。しかも古代龍じゃ」

「女の子 一人 助けた」

「このエルフの子一人残して全滅とは。痛ましい事じゃ」

「この子 保護 してほしい」

「悪いが、エルフはエルフの村に保護してもらうのが一番じゃ。我らも逃げなければ」

「村 捨てる？」

「うむ、教えてくれてありがとう」

伊丹は佐藤と相談する事にした

「佐藤さん、村を捨てて逃げるらしいです」

「この前の炎龍のせいか……」

「ええ、炎龍が来たらヤバイですよ」

「んな事はわかってる。最悪足止め程度で戦闘だな」

「そうですね」

「とりあえず避難作業を手伝うぞ」

部下と共に避難作業を手伝う為に動き出した

レレイ

「馬車が壊れた？ 残骸をどかせ！ この先の道が使えないって知らせてこい！ 言葉なんて手振り身ぶりで何とかしろ！」

珍しく声を荒げる佐藤

炎龍出現により村を捨てて逃げることになったコダ村の住民達を手助けしている

その先頭には倉田が運転する高機動車がノロノロと進んでいた

「こんなに遅く走らせたの、久しぶりっすよ」

「援軍を要請する訳にはいかないのですか？」

黒川の言う事はもつともである

自衛隊の輸送力を使えばこの程度は一瞬で運べる

だが、伊丹は首をふった

「敵さん俺達みたいなお規模な部隊は見逃しても大規模な部隊が来たらそれなりに対応すると思うんだよね。無計画な戦線の拡大、激化する戦闘、それに巻き込まれる民間人……考えただけでゾッとするよ」

これには流石に倉田も黒川も苦笑いするしかなかった

「なるほど。では、私はちよつと行ってきます」
「よろしく」

高機動車を降りた黒川を見送った伊丹だった

本を満載した1台の馬車

乗っているのは老人と水色の髪の少女

「なんじゃ？進まんのお」

「カトー先生！レレイちゃん！この先で荷物の積みすぎで馬車が壊れてしまって、それが道を塞いでいるんです」

「お師匠、ちよつと見てくる」

レレイと呼ばれた水色の髪の少女はカトーにそう言うのと馬車を降りて事故現場に向かった

そこでレレイが見たのは斑模様の服を着た人達だった

その近くには女性が一人倒れていた

レレイはすぐ近くに寄って容態を確認した

「馬はもうダメ。この人は大ケガ」

「危ない!!」

ケガの痛みで暴れた馬がレレイの上に覆い被さろうとした

レレイは目をつぶった

パン！パン！パン！

炸裂音がして目を開けると馬が力尽きて自分に向かって倒れようとしていた

その間に男が入ってきて馬を受け止めていた

「大丈夫!？」

別の女性が近寄ってきて自分を心配してくれた

「黒川!この女性重症だ!見てやってくれ!」

「了解!」

「他は残骸をどかして通れるようにするぞ!」

斑模様の服を着た人達がテキパキ動いて馬車の残骸を片付けていく

これが、レレイとジエイタイの出会いだった

「ふうく疲れた」

「お疲れさまです佐藤さん」

現場指揮をおやつさんに任せた佐藤は高機動車に戻って休憩していた

「隊長、あそこカラス妙に集まってないっすか？」

「どれどれ…… 本当だ」

3人の視線の先には大量のカラス

その下にはゴスロリ少女がちよこんと座っていた

「この距離で視線を合わせるか……」

双眼鏡を使ってようやくくっきり見える距離にも関わらず、少女は視線を合わせていた

「さて、どーすっかなあ……」

「最悪佐藤さんに倒してもらいましよう」

「いやーたぶん俺より強いよあの子」

とにもかくにも警戒するしかない3人だった

炎龍、再び

「連合諸王国軍は敗走、それぞれ帰路についた模様です」

「そうか……」

静かに報告を聞く男、皇帝モルトは驚きもせずまるでそれを知っていたかのようにだつた

「ピニヤ陛下の騎士団も出発したようです」

「わかった。ご苦労」

男が部屋を出ると、モルトは静かに目を閉じた

ゴスロリ少女は向かってくると、子供達が神官様だ！と言って寄っていった

少女はロウリイと言うらしく、エムロイの使徒らしい

ロウリイは助手席に乗ってきて伊丹と争いになり、伊丹が半分席を譲る事になった
「伊丹、俺後方の車両に行った方が良いか？」

「それは佐藤さんに任せますよ」

「あなたあ、お強いのねえ？」

「俺？」

顔を上げると直ぐ目の前にロウリイの顔があつた

「ロウリイ程じゃない」

「あらあ？どうしてそう思うのお？」

「数時間前に人を殺しただろ？そのバルバートからわずかだが血の匂いがある」

「よくわかつたわねえ。久しぶりに同じ位強い人を見つけたわあ」

ロウリイが後部座席の佐藤と話している間、伊丹は太陽を見た

すると一匹のワイバーンが飛んでいるのが見えた

次の瞬間

そのワイバーンに食いつき、こちらに向かってくる炎竜が見えた

伊丹は叫んだ

「倉田！走り回って民間人から気をそらせ！全車攻撃！佐藤さん！」

「任せとけ！」

佐藤はさつきまで迫ってきていたロウリイをのけると窓から64式小銃を向け、バーストモードで射撃した

全車窓から隊員が射撃し、軽装甲車からは12.7ミリM2も銃撃しているが、すべてが甲高い音を立てて弾かかれている

「佐藤だ！勝本！パンツァーフアウストを使い！」

「伊丹だ！目だ！目を狙え！」

「了解！！」

目を射撃された炎龍は明らかに嫌がっている

「倉田！飛び下りるからそのまま走れ！」

「ちよ?!佐藤さん!?!」

佐藤は高機動車のドアを開けると外に飛び下りた

「何を考えてんですか佐藤さんは!？」

「何か考えがあるんだ…… たぶん」

「そこは言い切ってくださいああい!!」

叫びながら炎龍の回りを回るように運転する倉田

佐藤はフルオートで射撃しながら近づいていき、手榴弾のピンを抜いて足元に投げた爆発で佐藤に気がついた炎龍は佐藤の方を向いた

「ヤベツ!!」

口の変化に気付いた佐藤は横に走る

さつきまで居た所が炎に包まれる

口の変化はファイヤブレスの合図だったのだ

佐藤は片手でフルオート射撃の64式小銃を支えながらも片手で手榴弾を連続で投げた

だが、手榴弾が効いている様子は無い

炎龍は首を動かして佐藤に頭をぶつけてきた

「けっ…… 頭突きかよ!!」

佐藤は炎龍の頭突きを受け止めると、口の中に手榴弾を投げ込み後ろに飛んだ

炎龍は直ぐに飛ばうとしたが、ロウリーのバルバートを足に喰らって転び、そこに勝

本のパンツァーフアウストが命中した

片足が吹き飛び、口の中の手榴弾が炸裂し炎龍が悲鳴を上げながら飛んでいった
伊丹達はそれを見ているしか出来なかった

犠牲者を埋葬した自衛隊には、敗戦ムードが漂っていた

悲しげな表情を浮かべる栗林の頭をこつんと伊丹が叩いた

「なあーに悲しそうにしてんだ」

「だって隊長……」

「守れなかった物を数えるんじゃない、守れた物を数えろ」

栗林は軽く睨んだが、佐藤の元に向かってきた

「佐藤一尉は、どう思いますか」

「何の事だ？」

「先島諸島の時にも出動したと聞きました。そこでも多くの特戦群隊員が死亡したんですよね？」

「ああ」

「その時、どう思っただんですか？」

「悲しいさ。数時間前まで同じ航空機の中で話して、一緒に降下した仲間がヘリの攻撃にさらされて倒れる」

そこまで話すと、一区切りした

「だがな、彼等は戦ったんだ。特戦群にとつては降伏は死ぬより辛い。あのC1の物資投下が無かったら俺達は降伏を余儀なくされてた。C1パイロット、倒れた仲間達全員が誇れる英雄だ。10分の1を守れなかったんじゃない、10分の9守れたんだ。それを誇れるようになれ」

「……はい！」

栗林は元気に返事をして去っていった

(栗林、お前は強いな)

心の中でそう思った佐藤

頭には先島諸島の自分がよぎった

中国軍のヘリに見つかり、効果がないと分かっているでも小銃で応戦してロケット砲に

やられた特戦群隊員

物資投下任務を完遂しようと最後まで残ったC1パイロット

(……戦ったんだ。パイロットも、特戦群隊員も、その全員が英雄だ)

そう思った佐藤は、目を閉じた

イタリカ

「で、身寄りの無い人達は？」

「私達について行きたいのですが、どうします？伊丹二尉」

「どうするかねえ」

頭を抱える伊丹

コダ村の避難民は身寄りのある人達はその身寄りの元に向かった

だが、身寄りの無い人達や親を失った子供等は伊丹達について行きたいと言う事だった

「どーします？佐藤さん」

「お前、あれやれば？」

「あれって、あれですか？あの、仮設住宅建てたりとか、配給したりするやつですか？」

「そう。お前が書類を書くだけだぞ？」

「それが面倒なんです！佐藤さん手伝ってくださいよ!？」

「頑張れ!!」

「ちよ!?!逃げないでください!!」

結局、伊丹が様々な書類を書いて仮設住宅を建てたり配給をすることになった

仮設住宅等の援助が完了するとレイ達から稼ぐ為の手段として竜の鱗を取って良いか?と言う話があった

どうやら鱗はこの世界では地味に高級品らしく、これを売れば生活に困る事は無いとの事だった

竜は防衛戦にてかなりの数が撃ち落とされていて、特に使い道も無かったのでOKした

「その鱗を取引したい」

「つて言われても、どうするの?」

「イタリカと言う町に商人が居て、信用できるらしい」

「つまり、俺達はそのままで連れて行けば良いのね」

「そう、ヨウジとサトウに頼みたい」

「俺は良いけど、佐藤さんは?」

「構わねえよ?」

と、こんなやり取りがあつて、一行はイタリカの町に向けて出発した

今回は先頭の高機動車に伊丹、倉田、佐藤、栗林が乗っている

「あれ?佐藤一尉、64式小銃じゃなくてM4じゃないですか?」

「おう。嵐で使用してたM4を持ってきたんだ」

「佐藤さんのM4はフルカスタムだから、元のM4とは全然ちがうぞ」
「持ってみると分かるぞ？ 栗林」

佐藤からM4を受け取った栗林は、すぐに原型のM4との違いに気付いた

「軽いですね。銃身も短いCQB仕様でサイレンサーが装備出来るようになってる…… 細かなところまでカスタムされてますね」

「ウチの嵐にガンスミスが居てな。そいつが細かくカスタムしてくれてんだ。俺が手を加えた所もあるけどな。こっちも同じくらいカスタムしてるぞ」

佐藤は腰からM1911コルトガバメントを取り出し、栗林に渡した

「こっちも細かい所までカスタムされてますね」

「栗林、ちよつとそれ貸して。俺も見たい」

「伊丹二尉、見たこと無いんですか？」

「ないない！」

「俺も見たいっす！」

「倉田、後で見せてやるから前を見て運転しろ…… お前ら！前！」

「ふえ?!」

ガバメントに夢中になっていた二人が佐藤の言われた通り前を見ると、煙が上がつて

いた

「燃えてるっぼいですね、あれ」

「あそこがイタリカだぞ」

「警戒しながら行きましようか。佐藤さん、後続に連絡を」

「おう。任せとけ」

「うふふふふ。血のにおい」

ロウリイが後部座席から身を乗り出して言った

精鋭、到着

夜の岩国基地にアメリカ空軍のC5ギャラクシー2機が着陸する

ギャラクシーの後部ハッチが開くと人影が素早く機内から出てくる

「よう、ボルボ」

「おう、マイケル。ギャラクシーの乗り心地は地味に良いな」

「俺達はこれが普通なんだけどな」

「いやーロシアの輸送機は乗り心地最悪なのよ。ギャラクシー採用してくんねえかな」

「ムリだろ？」

「ムリか」

「…… 集合かかっていますけど」

集合を無視して喋るマイケルとボルボ

マイケルはネイビーシールズチームリーダーで、ボルボは第14独立特殊任務旅団、つまりスペツナズの中から選抜された分隊のリーダーである

2機のギャラクシーにはSAS、グリーンベレーまで搭乗していた

グリーンベレーは特地に派遣される為だが、ネイビーシールズとスペツナズ、SAS

は中韓北の派遣した特殊部隊に対応する為だった

スぺツナズとネイビーシールズは町中での諜報活動をした事もあるので派遣された
「マイケル、中韓北の特殊部隊はどうなんだ？」

「北が最悪だな。練度が低い」

「何故だ？北は特殊部隊を育てていただろう？」

「いやーその特殊部隊を我々が叩き潰してしまつて」

「は？」

後ろから聞こえた衝撃の内容に抜けた声を出す二人

後ろには若い日本人が立っていた

「あ、失礼しました。自分陸上自衛隊の小林速人と申します」

「あ、ああ。それで小林、叩き潰したとは？」

「文字通りです。一ヶ月ほど前に我々の部隊が北に潜入、訓練中の北特殊部隊を片っ端から叩き潰して脱出しました。ですから北特殊部隊は再編されたばかりで練度が低いのです」

「特戦群の仕業か？」

「いえ、自分は嵐の隊員なので」

二人は驚く

目の前の若い男があゝの嵐の隊員だと言うのだ

「嵐、想像以上の実力らしいな」

「マイケルさん、舐めてもらっては困ります。隊長は北特殊部隊を一人素手で片っ端から地面に叩きつけてましたから。それに死者どころか負傷者も無しです」

「マイケル、嵐の隊長はヤバイぞ」

「なんだボルボ、知ってるのか？」

「T-80戦車1両と共に訓練していたら、訓練相手だった嵐隊長が素手で俺達スペツナズを10秒もかからず制圧して戦車のエンジングリル素手で叩き割ってたぞ」

「素手で!?!」

マイケルは戦車のエンジングリルって素手で叩き割れる物じゃ無いよな!?!あれ?そもそも割れる物じゃ無くね?と思いつつあらためて嵐隊長、佐藤の恐ろしさが分かった

「ぶえつくしよい!!」

「風邪ですか?佐藤さん」

「噂されてんじやねえか?スペツナズ辺りに」

戦車エンジングルグル叩き割り事件の犯人、佐藤の大きなくしやみが響く

イタリカ城外まで来たは良いがなんか警戒されている

「めんどいな……よし伊丹、行ってこい!」

「なんて投げやりな!?!」

「逝つても良いぞ?」

「ヒドツ!」

「まあ、嘘だ。気を付けて行つてな」

「はあ、分かりましたよ」

伊丹が車外に出るとレレイ、金髪エルフのテユカ、神官のロウリイが付いていった

佐藤はその様子を双眼鏡で見ている

佐藤以外にもちらほら双眼鏡を使っているのが見える

伊丹が城門横の小さな門の前に立つと、勢い良くドアが開かれ伊丹を直撃した

「バルスツ!」

「..... は?」

某有名映画の大佐の言葉を叫んだ伊丹

間拔けな声しか出ない佐藤だった

イタリカ防衛戦

「捨て駒だな」

「やっばそう思いますか」

「当たり前前だろ？こんな所に俺達だけ、俺達をエサに敵を誘き寄せて城内で防衛戦をする…… 作戦としたら悪くない。けどここを狙ってくることは無いな」

「なぜですか？佐藤一尉。あと二人とも、暗視装置です」

「お、ありがとう。理由は俺達の力を知ってる相手だから俺達の居るところは避けるだろうからな」

伊丹と佐藤、それに暗視装置を配る栗林が話し込む

伊丹が気絶して少したつと佐藤はイタリカへの突入準備を命じた

が、そのすぐあと伊丹から連絡が入りイタリカは現在盗賊団に襲われていること、帝国の姫様ピニヤから救援を求められた事を聞き、城内に入り防衛を行うことにした

既にアルヌス駐屯地にも増援要請をしている

暗視装置を着けて配置に就くも何も無い

伊丹とロウリイが何か話していたが、何だったんだ？

そんなことを佐藤が思っていると反対側の門が騒がしくなった

「チツ！伊丹！」

「佐藤さん！富田！トラックに！栗林！ロウリイと一緒に行け！」

「ロウリイ少し我慢して！」

栗林はロウリイを抱えあげると服をギユツと掴む事で応じた

が、我慢出来なかったらしく家の屋根を走って向かってしまった

伊丹と富田が降りてきてトラックに飛び乗ると伊丹はアクセルを踏み込み発進する

「ちよ！隊長！急発進とか！」

「構うな伊丹！」

「了解佐藤さん！」

「きやあああああああ!!」

………何か栗林の悲鳴初めて聞いたな

佐藤と伊丹、富田、栗林は自分達の居た城門と逆方向の城門に向かった

「クソツ！我慢できるか！」

「このヤロオ！ブツ殺してやる！」

「お前らまで！」

ピニヤは城内での二重防衛戦を計画していた

が、死体が投げ込まれ、臆病者！と罵られた者が我慢できるはずもなく城内消耗戦をするはずが次々と柵を飛び越えてゆく

こうしてピニヤの作戦は頓挫したのだった

人々は口々に叫んだ

「緑の人達は!?!」

と

それを聞いたピニヤは何とも言えなかった

「緑の人達が助けてくれるはずもない。捨て駒としてしまったのだから……」

盗賊が雄叫びを上げる

これぞ戦い! アルヌスは戦いでは無かった!

その声を上げていると突如数人の頭が吹き飛んだ

それに続いて緑の服を着た人が柵を飛び越えて突撃して行った

「あれは神官ロウリイ!?!」

ロウリイと栗林、二人が敵を次々と格闘で制圧してゆく中、佐藤が乱入した

「伊丹、富田、援護頼むぞ!」

「了解」

「佐藤さん、気を付けて!」

「分かっているさ」

佐藤は自分の腰の鞘から一本の日本刀を取り出した

独特な模様がついた刀、妖刀桜吹雪

使う者によって切れ味が異なると言われており、佐藤が使用するとケブラーや強化アラミド繊維等で作られたボディアーマーを着た兵士を真つ二つにする程の切れ味を發揮する

桜吹雪を手に取った佐藤は敵の中に突つ込むと敵を一人また一人と切っていく

城内で3人が暴れているが、城外ではヘリが攻撃していた

AH1コブラの機銃掃射、UH1ヒューイからの銃撃で次々と盗賊が倒されお土産物よろしく手榴弾をバラ撒いて行く姿は陸自の象徴とも言える

AH1コブラの内一機が城内の敵の上に現れ機銃を動かす

佐藤と伊丹と富田は3人でうなずきロウリイと栗林を回収する

全員が柵の外に出るとコブラの攻撃が始まった

ワルキューレの行進をBGMに7・62ミリ弾の暴風を降らせるミニガン2基の射撃によって城内の敵は一掃された

城外ではUH1ヒューイから隊員達が降下してくる

もう、誰も気軽に声はかけられなかった

拘束と奪還

「隊長、大丈夫ですかね？」

「大丈夫だろ」

「隊長、ああ見えてレンジャー持ちだから」

「そうだな」

「富田、ワンモアプリーズ。誰が、何だって!？」

「伊丹隊長が、レンジャー持ち！」

「マジ?」「マジ」

「そのマジ、ありえなくいい！」

イタリカで条約が締結され第4戦闘団がアルヌスへと飛び去った

そのため伊丹達第3偵察隊は先に進んでいたのだが、騎兵団らしき（それも女性ばかり）一団と遭遇、伊丹が拘束されると言うトラブルが起きた

その騎兵団がイタリカに入ったことを確認したため、イタリカ近くで作戦会議を行っている

また、伊丹が不在のため指揮は佐藤に一任されていた

「富田、倉田、黒川、栗林、桑原と俺、それにロウリイ、テユカ、レレイのメンバーで伊丹を奪還する。不要な発砲は控えるよ」

「もし、排除しなければならぬ人物が居たら？」

「俺が撃つが……… そもそも撃ちたくないし何とかやり過ごす」

「しかし、撃つたら音で気付かれるのでは？」

「俺のM4はサプレッサー装備可だ。サプレッサーで撃つから大丈夫。さて、行くぞ」

佐藤を先頭に出発した奪還部隊

各員がそれぞれの方向を警戒しつつイタリカに近づいてゆく

城内へ侵入しようとするが、城門の上に一人歩哨が立っていた

それを見た佐藤は思わず悪態をついた

「クソツ…… 城門はガラ空きなのにあの歩哨のせいで入れないな」

「佐藤一尉、狙撃は？」

「ダメだ黒川、できる限り犠牲は避ける」

「あの…… 私に任せてもらえない？」

「できるのか？テユカ」

「殺さずに、でしょ？」

テユカが何かを唱えると門の上の歩哨が倒れた

それを見ていた隊員達が驚いた

「どう？寝てるだけよ？」

「パーフェクトだテユカ。中に入るぞ」

「了解」

城内に入ると警備はザルを通り越して無警戒だった

が、さすがに施錠はされているのか伊丹が居ると思われる館の窓はキッチリ閉まっていた

「佐藤一尉、どうします？」

「黒川、少し待て…… OK、行けるぞ」

「この短時間で窓を？」

「ああ。道具されさえあればどんな窓でも開けられる」

1ヶ所の窓をこじ開けるとそこから中に入っていく

入ると廊下になっていて、メイド服を着た二人の女性が居た

「！」
佐藤が銃を向けて安全装置を解除する

が引き金を引くよりも先に相手が喋った

「伊丹様のお連れの方々ですね？こちらです」

「……そうか。ありがとう」

佐藤は安全装置を掛けなおしてメイドについていく
他の奪還隊のメンバーも警戒しつつついていく

すこし歩いてとある部屋に入るとベットに伊丹が居た
伊丹はこちらに気付くと頭をかきながら

「あ、どうもです」
そう言った

皇女、日本へ

「では……私も一緒に行かせてもらおう！」

「え？」

伊丹の居る部屋でちょっとした交流会が開かれているとボーゼスがドアを開けたが、誰も気付かず空気扱いされキレて伊丹に平手打ちを喰らわせたのだ

当然騒ぎになってまたもやピニヤを困らせた

しかも伊丹は国会から証人喚問を求められているのですぐにでもイタリカに帰らなくてはならなかったため、それをレレイに通訳してもらった

が、例が悪かった

レレイは国会を元老院と通訳したのだ

この世界で元老院に呼ばれる軍人とはエリート

だからピニヤを悩ませていた

で、その結果ピニヤがイタリカまで付いてくるようになった

先頭の高機動車に伊丹、佐藤、ピニヤ、ボーゼス、レレイ、テユカ、ロウリイが搭乗している

運転席の伊丹が声を佐藤にかけた

「全速力でですけど、後ろ大丈夫ですかね？」

「大丈夫……じゃねえわ」

「マジっすか？」

「おう。既にグロッキーだしさっきの74式の訓練を見たからじゃね？」

さつき74式戦車部隊の訓練を見たあと何か言い争いな物をしていたが何を話していたのか聞き取れなかった

が、後ろからの声は聞き取れた

「サトウ殿、先程の鉄の象は一体？」

「鉄の象……ああ、74式の事か。あれはこつちの世界ではもう旧式でしてね。もう力不足なんですよ」

「あ、あれで力不足だ?!それが我が国に向けられたら……」

「そうだ、ある映像を見せましょう」

佐藤はそう言うのとタブレットを操作し映像を再生して後ろに座る特地の人達に見せる

映像とは湾岸戦争の物だった

「サトウ、これは？」

「レレイ、これは湾岸戦争と言う戦争の物だ」

「ワンガンセンソウ？」

「そう。ほとんど一方的な戦闘だったけどな」

「どのくらいの期間やっていた？」

「陸上戦は開始から100時間で終わったな」

そこまで言うともう駐屯地に着くため前を向く

ゲートの向こう側に行くには多くの手続きが必要なので佐藤は手続きを、伊丹は上への報告に向かった

面倒な手続きが終わり、伊丹達は門の向かう側に来た

待ち受けていたのは二人の人だった

「どうも、伊丹さん。エスコートを承っています、駒門です」

「…… おたく、本当に自衛官？」

「くつくつく、さすが二重橋の英雄。私は公安ですよ」

公安の駒門と伊丹が会話をしていると佐藤にも声をかけるものがあった

「峯一、ようやく帰ってきたわね」

「絵里、留守番ご苦労さん」

会談と強襲

「さて、ホテルに向かおう」

伊丹達は国会での証人喚問があるため国会に向かったがピニヤとボーゼスは非公式、つまり本来ならば来ていないハズなのでホテルにて別のお偉いさん方と会談を行うことになっている

ホテルまで移動し、入り口から普通に入る

普通にと言っても客は居らず、居るのは警備員とホテルスタッフのみである

「ピニヤ皇女、ボーゼスさんですね？こちらです」

「わかった。案内を頼む」

「佐藤一尉、私達どうします？」

「部屋で待機してようか。ここに居る四人は会談終わるまでヒマだから……間違えた、五人だ」

「え？」

栗林と富田は一瞬固まった

ここには佐藤、栗林、富田、絵里の四人しか居ないのに佐藤が五人と言い直したから

見えてはいけないものが見えたのかと思った

が、後ろからの声で正しいとわかった

「あら。間違えられるとか悲しいわあ？」

「悪かったよ。てか、来たのか」

「待ちきれなかったのよ」

「何時の間に!？」

二人の間から顔を出すように金髪女性が立っていた

その女性はおもむろに佐藤の隣に行くと言をとった

「さ、佐藤一尉、そちらの方は？」

「自己紹介まだだったわね。私は佐藤アレフティナ。峯一の妻よ」

「ええええええええええええ!?!佐藤一尉の奥様!?!マジですか佐藤一尉!?!」

「マジだ」

「自分もビックリですよ……」

金髪の女性改めアレフティナはニッコリ笑いながら話したが栗林と富田には衝撃の

内容だった

そんなやり取りをしていると絵里が部屋を確保していた

「アレフティナさん、部屋を確保したから行きましょ？」

「ええ♪」

「佐藤一尉」

「ん？何だ？栗林」

「奥様、部屋まで連れて行って良いんですか？」

「大丈夫だろ。あいつ元SVRのトップエージェントだから」

「え」

元SVRトップエージェント、それがどれ程凄いか一瞬で理解した二人は固まった

SVR、ロシア対外情報庁はロシアの諜報活動の一角を担っている組織で表には出せない活動も行っている

「どうやってそんな人と知り合っただんですか？」

「あいつ、任務中に他国の諜報工作部隊と鉢合わせちまっただ。その時俺と出会ったんだ。で、俺がその部隊を潰してケガが治るまで匿ってたんだ。最終的にバレて襲撃されてあいつ庇って瀕死になったけどな」

「わお、アニメみたい……」

栗林の言葉を無視してアレフティナに呼ばれたのでそちらに行く佐藤

二人は並んで手を繋いで歩き部屋に向かった

「いやー会談長いな」

「良いじゃない♪」

「何でそんなに楽しそうなんだよ……」

佐藤の隣で楽しそうにするアレフティナ

「あら、あなたの隣に居るだけで幸せよ？」

「……さいですか」

「あ、甘い……」

場所お構い無しに砂糖を振り撒くアレフティナから少し距離を取る二人

佐藤は不意に外を見た

その外の光景に違和感を覚えた

双眼鏡を使ってようやくよく見える距離のビルの外壁を清掃中の作業員が不自然な動きをしている

佐藤が目を細めよく見ると手にはカールグスタフが握られていた

「危ない!!」

カールグスタフが火を吹きロケット弾が飛んでくる

アレフティナを抱き締めながら窓から距離を取るように跳んだ

ロケット弾は見事着弾し窓ガラスと内装の一部をキレイに消し飛ばした

「アレフティナ！大丈夫か！」

「ええ！それよりここを離れないとね」

「わかってるさ！栗林、富田移動するぞ！」

「サトウ殿！何が起きた!?!」

「ピニヤ閣下、移動します！離れないように！絵里！」

「わかってるわ！来たわよ！」

絵里がドアを開けると一人、青髪の女性が大きなバックを抱えて入ってきた

「海未、持ってきたか？」

「はい。これですよね？」

「ああ、ナイスだ。アレフティナ、こいつを」

「AK12UとMP―443ね。カスタムされてて使いやすいわ」

「峯一にはこちらを」

「MP5か、ありがとう」

「あ、申し遅れました。私、陸上自衛隊特殊部隊嵐所属、園田海未一尉です。よろしくお

願います」

「二人はこれを」

佐藤がバツクの中から銃を取り出すと栗林と富田に投げた

栗林に投げたのはM9で、富田にはH&K USPだった

どちらも自衛隊では使用していない銃なので二人は戸惑いながらも予備弾倉を海未から受け取った

「海未、脱出ルートは？」

「普通に正面入り口から逃げますよ？車が待機してますから」

「わかった。さあ行くぞ！」

佐藤とアレフティナを先頭に部屋から出ていった

脱出、合流

大きな筒、カールグスタフを持つ清掃員の男

バラクラバをしているので顔全体は見えないが目線の先には煙を上げるビルがあった

ふとスマホを取り出してリダイヤル機能で電話をかけた

「どうも」

『こんにちは。どうですか?』

「ビルの外壁に居ますが風はすぐ吹き」

パァン

その音が聞こえたのは全身の力が抜けてからだった

胸から熱く赤い液体が流れている

撃たれたのだ

『どうしました!?!』

スマホに手を伸ばすが力が入らない

そのまま男の意識は無くなり二度と起き上がる事は無かった

「
ク
リ
ア
」

「了。行くぞ」

「障害無し」

銃口から硝煙を上げるM700

それを構えるのは海未で、背中に背負った

先程の作業員を撃ったのは海未だった

階段を降りて入り口から出る予定だったが、作業員が待ち構えている可能性が否めず非常階段を使って1階まで降りる事にした

降りている最中にまたカールグスタフのロケット弾を撃ち込まれると厄介なので狙撃で先に排除していた

敵も非常階段を使うことを予想してなかったのか誰も居らず嵐の三人とアレフティナを先頭に降りていき1階まで着いた

そこにはバンが待機していた

「チツス隊長。乗りますか？」

「いや、高尾は囷になってくれ。徒歩で移動する」

「リョーカイです。後ろの方に言っておきますけど俺自衛隊特殊部隊嵐所属、高尾和成一尉です。よろしく」

高尾はそれだけ言い残すと猛スピードで去っていった

佐藤は後ろからの目線を感じ取った

「隊長……」

「な、何かな海未」

「何で車使わないんですか!?折角用意したんですよ!」

「だって車とか一番狙われるんだもん。それに……」

佐藤はポケットからスマホを取り出すと画面を海未達に見せた

「あちらさんが地下鉄で移動するって言うんだからな。さあ行くぞ」

銃を隠して駅に向かう一行

改札を出た所に伊丹達が居た

「伊丹、国会では盛大にやらかしてたな?」

「見てたんですか。それと、あれ俺じゃないですよ」

「変わらんよ」

談笑する二人

するとロウリイの大きな包みを奪おうとした男がその重さに耐えきれず下敷きになった

「何やってんだ……」

駒門がその包みに近付き持ち上げようとする

「伊丹、あの包みつてロウリイのハルバートだよな？」

「ええ。それがどうかしたんですか？」

「いや、あれ結構重いぞ？ バーベル並に」

「え」

伊丹の表情が引きつると同時に駒門の腰からパキツ！と音がする

駒門は急性腰痛症、つまりぎっくり腰を発症し膝から崩れ落ちる

「なんつう重さだ…… バーベル並だぜ」

「大丈夫か？」

腰を押さえて横たわる駒門の横では佐藤が片手でハルバートを持ち上げて振り回していた

駒門は救急車にて病院に搬送された

ここまで騒ぎになると流石の作業員も手出しできない

伊丹達を知るよしも無いがこの日、この出来事を原因に作業員達の一時撤退が命じられた

駒門の献身的な犠牲により、伊丹達は一時の安心を得たのだった

出会い

「伊丹、ちょっと外に行ってくる」

「わかりました」

伊丹の元嫁、梨沙の家に転がり込んだ一行はようやくやく落ち着いて休めていた
伊丹、富田、佐藤は寝ずの番をするため交代で起きている

が、佐藤は交代より少し早く起きたので外の空気を吸いに家から出た
ポケットから葉巻を取り出して火をつける

彼の愛用葉巻はHアツプマンで、戦場でもくわえている事が多い

不意に後ろから声がかけられた

「ジョン・F・ケネディですかあなたは」

「海未、起きたのか」

「はい。アレフティナさんなのですが」

「ハローダーリン」

いつの間にか起きていた海未とアレフティナが両サイドに来る

3人で廊下の手すりに寄りかかって夜空を見上げた

「あの日も、こんな夜空だったわね」

「あの日って、お前と出会った日か？」

「ええ。あの時敵だと思った人が最愛の人になるなんてね」

「それは同感だ」

笑いあう二人

佐藤は懐かしそうに当時を思い出していた

『エンジェル、お前の任務は敵工作員の監視だ。何か問題があれば一時撤退せよ。これ以降連絡は緊急時のみとする』

「了解」

黒のタイトスカートにジャケットと言う格好で耳に小型無線機を着けるアレフティ
ナ

彼女の任務は別国工作員の監視で、ジャケット内にはH&K社のMP7がサイレンサー付きですぐ撃てるようになっていた

自国の武器を使わないのは装備で何処の国の者か判別されるのを防ぐためだろう

周囲を警戒しつつ曲がり角の先の工作員を見る

左右を見渡し警戒しているようだ

右に行つたので追いかけてしようとした

すると後ろから声がした

「動くな！」

「!?!」

振り向くとそこにはサイレンサー付きAKS74Uを構える数人の男が居た

口振りや身振りからこちらの正体はバレているとアレフティナは考えた

「やはり、悪い虫が付いていたか。後ろを向け」

「……………」

(何とかしないとマズイ……………)

静かに言われた通り後ろを向くアレフティナ

足に激痛が走ったと思ったら血が流れていた

撃たれたのだ

足に力が入らずその場にしゃがみこむ

「くっ……………」

「さて、何処の「レディにその扱いは無いんじゃないか?!」!?」

「えっ?」

アレフティナが顔を上げると目の前に一人の男が目線を合わせるようにしゃがみこんでいた

その男は顔を近づけるとアレフティナに耳打ちした

「俺は佐藤峯一、自衛官だ。ちよつと失礼」

「え!?!ちよつ!?!」

佐藤はアレフティナのジャケットの中に手を入れると迷うことなくMP7を掴み、引

き金を引いた

M P 7 から打ち出された弾丸は真っ直ぐに男達の頭へと向かい、頭を貫いた

男達が全員倒れると佐藤はアレフティナの腰にあったグロック17（サイレンサー付き）を取ってしまった

アレフティナは慌ててM P 7を佐藤に向ける

「どうゆうつもり!？」

「何がだ？」

「なぜあなたはそんなにも平然と他国の作業員を助けられるの!？」

「何も企みは無いし助けた理由は…… 何だろうな、特に無いじゃだめか？」

笑いながら言う佐藤

アレフティナもそれを見て敵意は無いとわかったのか銃を下げた

が、アレフティナは後ろから来た特殊工作部隊のAKS74Uの銃弾が一発、背中に命中してしまう

何とか立っていたアレフティナだったが被弾した衝撃でまたしやがみこんでしまった

佐藤は咄嗟にアレフティナを抱えて通りに停めてあった車に急ぐ

佐藤の愛車のフォード・マスタングの助手席にアレフティナを乗せると自分は運転席

に行き急発進させた

佐藤はアレフティナに止血用の布を渡すと運転しつつ様子を見た

「大丈夫か？」

「ええ。血が止まれば」

「そうか……っ」

「?……まさか！」

顔をしかめた佐藤を不審に思ったアレフティナは佐藤の背中を見た

予想通り服に穴が空きそこから赤い液体が流れていた

「撃たれていたの!？」

「車を出すときにな。何発かボディを貫通したみたいだ……な」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

アレフティナは自分の着ていたジャケットを脱いで佐藤と座席の間に挟み傷口を押

さえた

そのまま佐藤の家に向かい家で待機していた嵐の隊員に手当てをしてもらった

これが佐藤とアレフティナの出会いだった

首脳達

「さて、今日一日遊ぶぞ！」

「おう、テンション高けえな」

「良いじゃない♪」

2日目

2日目の夕方には横須賀で日本首相とアメリカ大統領がピニヤ達特地組と会う予定だが、夕方なので午前はそれぞれ行きたい所に行くことになっていた

「伊丹、お前はあそこだろ？」

「そうです」

「富田は？」

「ピニヤさんの方に着いていって案内します」

「栗林は…… 梨沙達女性組の方だな。絵里、海未二人は嵐に出動準備をさせといてくれ」

「わかりました」

「わかったわ」

「おし、行動開始だな」

伊丹、富田とピニャとボーゼス、梨沙と栗林とレイとテユカとロウリイ、佐藤とアレフティナと言うグループで1日行動する事を確認してバラバラと行きたい所に向かった

「で、俺らはどこに行く?」

「うーん、渋谷とかそこら辺を回りましたよ?」

「そうだな」

二人は渋谷や池袋等で買い物をして回った

時間を見て横須賀の店に向かうとピニャ達特地組が海の方を見て驚いていた

「何で驚いてんだ?」

「たぶんあれじゃないですか?」

「?..... ああ、あれか」

横須賀にはちようどアメリカ第7艦隊旗艦ジェラルドRフォード級空母3番艦エンタープライズが錨を下ろしていた

また、その周囲にはダイコンデロガ級巡洋艦シャイロー、同巡洋艦チャンセラーズビル、同巡洋艦アンティータム、ワズプ級強襲揚陸艦ボノムリシャルル、サンアントニオ級ドック型輸送揚陸艦グリーンベイが停泊していた

「どうやらその船を見て驚いたらしい

店の前には一人、アメリカ人が立っていた

「あんな達が来賓か？」

「そうだ」

「グラハムだ。中にどうぞ」

中に入ると貸し切りらしく俺達以外は誰も居なかつた

また一人のアメリカ人が来て敬礼してきた

「グワイゼル・ハイデツカーです。お久し振りです、佐藤一尉」

「グワイゼル、元気にしてたか？」

「は！佐藤一尉、奥様もご一緒にどうぞとの事です」

「あら。ありがとう」

「悪いな梨沙。さすがにお前は連れていけないから別の席で何か食べててくれ。飲み過

ぎなければ酒も良いぞ」

「やったあやったあ！」

隣では伊丹が梨沙にクレジットカードを渡していた

グワイゼル先頭で二階に行き、部屋の襖を開ける

佐藤が初めに部屋に入りその後が続いてぞろぞろと入っていく

部屋では既に二人が座っていた

「佐藤一尉、そちらが帝国の姫様かな？」

「は！帝国の皇女、ピニャ・コ・ラータ氏と騎士ボーゼス・コ・パレスティー氏になります」

「はじめまして。私は日本国首相、本位慎三です」

「アメリカ合衆国大統領、デイレルです」

「ピニャ・コ・ラータです。本日はこのような場所を作っていただきありがとうございます」

始めこそ堅苦しい挨拶で始まったがその後は日本料理に特地組が舌鼓を打っていた

佐藤とアレフティナが二人で話しているとデイレルが話し掛けてきた

「ミスター佐藤、お会いできて光栄だよ」

「それは私の台詞では？」

「いやいや、佐藤一尉の話はかねてより聞いているよ。グワイゼルを筆頭としたCIAパラミリタリーチームを育成した等ね」

「あなた有名ね」

「そうか？」

そんな会話を楽しんでいる佐藤に一本の電話が来た

部屋を出て廊下で取る

「佐藤です」

『柳田です。すみません』

「柳田、どうかしたのか？」

『実はこちらの諜報員がとある情報を掴みまして。それが帝国がもうひとつ門を開けると言う情報なのです』

「もう一つ!?!それはどこに開くんのだ？」

『予測になってしまいますが、帝国の大規模な艦隊が出港したとの情報もあります。恐らく洋上かと』

「だが、レイによると門を同時に開くことは出来ないと言ってたが」

『それを可能にする装置があるらしいです。最も作るのに1000年ほどかかるらしいですが。とにかく、日本近海の警備を強化する必要があります。気にせず楽しんでください』

「そうさせてもらうよ」

電話を切った佐藤は部屋に戻った

旅館

首脳達との会談を終えた伊丹達は最終目的地である箱根に向かった

自衛隊共済組合の運営する宿で全室貸し切り状態に出来た宿があるらしくそこが今日の宿泊先となる

箱根は大人気なので電車を降りて駅から出ると多くの観光客が居た宿から送迎バスが出ているのでそれに乗って宿へと向かった

「中々に良いところじゃないか」

「ええ。じゃあ3部屋あるらしいですから部屋割りしましょうか。てか、もう決まっていますねこれ」

伊丹の手元の紙を覗くと既に名前が割り振られていて、部屋割りは

栗林、ロウリイ、レレイ、テユカ、ピニヤ、ボーゼス

伊丹、富田

佐藤、アレフティナ

と書かれていた

「……どれだけ準備良いんだ？」

「しかも佐藤さんとアレフティナさんが別と言うナイス配慮」

「そこ配慮するならとつとと日本に居る他国の工作員を排除して欲しいがな」

「ええやん。その振り分けはウチが考えたんやで？」

奥から声がしたのでそちらを向くと物腰の柔らかそうな紫長髪の女性が着物で現れた

「希、居たのか」

「ウチだけやないで？ 他もや」

「てか何でその服装を？」

「旅館の人が貸してくれたんよ」

会話を進める二人

佐藤がポカンとしている皆に気付いて紹介した

「ああ、紹介がまだだったな。こっちは」

「陸上自衛隊特殊部隊嵐所屬、東條希一尉や。よろしくな」

につこり笑って奥へと消えていった希

佐藤は質問攻めにされながら部屋に向かった

伊丹達の居る旅館に面した山には多数の人影があつた

来賓防衛の為にSEALsチームと特殊作戦群が配備されていた

SEALsチームリーダーマイケルはサイレンサー付きM4A1を手に待機していた

まだ敵襲が無いためやることが無いのだ

隣には部下のウインストンが居る

「しっかし暇ですね隊長」

「そうだな。やつら夜襲するつもりだな。てか何か暇潰し道具無いか？」

「トランプならありますよ？」

「……ポーカーだな」

なぜこんなところにトランプを持ってきているかは置いといて木の上でポーカーを始める二人

その様子を見ていた特戦群の隊員は戸惑っていた

「戦場でポーカーしてる人初めて見た」

「だろ。ちよつと俺も混ぜてくる」

「はっ？」

駆け足で行って木の上にするすると登ると三人でポーカーが始まった

その様子に口を開けたままの隊員

すると無線から通信音が鳴った

「こちらスレッズ」

『こちらエンジェル。マーカーが三つ固まってるのだけどういうこと？』

「あー……ポーカーやってます」

『はあ、了解。何とかしとくわ』

数分後、無線からの声にビククリして三人が木から落ちた

嵐、集結

「わあ！凄いわね」

「そうだな」

部屋に行き荷物を下ろす二人

風呂は皆で決めた時間に入るとしたのでまだ一時間半ほど余裕がある

「どうする？俺は一度あいつらの所に行くけど」

「私も行こうかしら。久しぶりに会いたいし」

「じゃあ行くか」

嵐隊員は来賓の三つの部屋から一部屋飛ばして大部屋に待機している

部屋を出て廊下を少し進み、希から予め借りた鍵を使って開け中に入る

先に入った佐藤を迎えたのは枕だった

「あ」

「………… お前ら、元気だな」

「峯ーく!!」

佐藤の顔を捉えた枕が落ちると、二人の女性が飛び付いてきた

(……何これ)

後ろから気になってついてきた栗林は状況が理解できずポカンとしてしているとアレフ
ティナが栗林に気付いた

「峯一、栗林ちゃんに隊員達の紹介しないと」

「そうだな。全員！」

「陸上自衛隊特殊部隊嵐、高坂穂乃果一尉です！」

「同じく嵐、南ことり一尉だよ」

「じ、自衛隊特殊部隊嵐の小泉花陽一尉です」

「嵐の星空凛一尉にゃ」

「にっこにっこに〜！ども、嵐の矢澤にこ一尉だよ！」

「嵐所属の西木野真姫よ」

「今は居ないが絵里、希、海未もここに來てる」

「ここに居るのが精鋭と称される嵐のほとんどのメンバーよ」

「まさか嵐の大半のメンバーが女性だったとは……」

驚きの事実には呆気に取られる栗林

この後栗林も交えて部屋で談笑をしていた

談笑タイムを抜けて外に出た佐藤

Hアップマンに火を着けると口に運ぶが、途中でスリ取られた

「ダメダメ。タバコは体に悪いよ？」

「穂乃果、取るなよ」

「しようがないなあ。はい」

後ろから来た穂乃果からHアップマンを奪還し再び口に運ぶ

穂乃果と共に空を見上げる

「あの時と変わってないね、峯一は」

「…… あの時、か。今でも後悔しか残ってないがな」

「そうなの？ 峯一は私達を守ってくれた。少なくともそれだけは真実だよ」

「守ったねえ。その結果憧れられてまだ若い少女達をこの世界に引き込んだ。そ

れは俺の最も重い罪かもしれないな」

「そうかな？ 別に罪じゃないと思うよ？ それにこの道を選んだのは私達全員が相談して

決めたこと、それが峯一に出来る唯一の恩返しだって。それに……」

「それに？」

「峯一のどんな困難な状況でもタバコを口にしながら何とかしようとする姿に憧れるな

なんて、無理だよ！」

「そうか」

佐藤は微笑みながら空を見上げるが目は懐かしんでいた

あの時、蜂の巣にされながらも見知らぬ少女を守り1ヶ月間の昏睡状態から目覚めた佐藤が真つ先に訪れたのは見知らぬ少女が居たところだった

そこで再会した少女は、いまや隣で空を見上げる特殊部隊員で自分の部下になった

佐藤は静かにHアツプマンを吸い続けた

主人公紹介（後日追加あり）

佐藤峯一

年齢

34歳

生年月日

1986年5月4日生まれ

出身地

日本東京都生まれ

身長

185センチ

体重

80キロ

愛用品

Hアップマン

使用武器

M4、M1911A1、MP5、ペネリM4を佐藤自らがカスタムした物を主に使用しているが、AK47、M16、M82、トカレフ、マカロフ、M9、89式小銃、64式小銃など様々な銃器の使用歴がある

また、ナイフ、日本刀、警棒などの近接武器、C4、ダイナマイト等の爆発物等様々な物の使用歴あり

好きな物、事

アレフティナ 峠を走る事

20歳の時防衛大学校に入り学校内トップの成績で卒業、陸上自衛隊に入る

25にして幹部学校を飛び級で卒業、その際成績をことごとく塗り替えたらしい卒業後格闘徽章、レンジャー徽章、空挺徽章などを取り特殊作戦群に所属する

27の時、特殊作戦群より上の存在の必要性を感じ各国特殊部隊を渡り歩き自身の体験や経験を元に自衛隊特殊部隊、嵐を創設しアレフティナと結婚する

28で竹島上陸の韓国特殊部隊排除作戦と銀座攻撃、29で先島諸島奪還作戦、30で音ノ木坂騒動の鎮圧に参加した

その後31で穂乃果達が嵐に入り32で行方不明となる

が、33で再び嵐へと戻る

34で銀座事件に巻き込まれる

参加作戦

韓国特殊部隊排除作戦、先島諸島奪還作戦、音ノ木坂騒動、北朝鮮特殊部隊壊滅作戦、イラク、アフガニスタンでのタリバン、アルカイダ掃討 銀座攻撃

100m8秒台だったりロケットランチャーの直撃に耐えるガラスを素手で割ったり人間離れしている

愛車であるフォード・マスタングはカスタムされていて拳銃弾を止める防弾板、ハンドル下にはM10が隠されているなど佐藤ならではのとなっている

もちろん走行性は損なっていない

酒は強くみんなが座っていられない程酔っている中同じ量飲んでいるのに飲み続けている

佐藤を見たアメリカ兵は鬼神、世界最強の男、日本が誇る人間兵器と話していた
部下の事を家族とも呼び、なにより大切にしている

自分から険しい道を選び苦しむとんでもないバカでもある

佐藤アレフティナ

旧姓

アレフティナ・ルカ

年齢

34歳

生年月日

1986年8月16日

身長

180センチ

体重

60キロ

愛用品

AK47をかたどったウオツカ瓶

使用武器

AKシリーズや口紅型銃の他、ありとあらゆる銃器、ナイフ等あらゆる武器の使用歴

あり

好きな物、事

佐藤峯一 ウオツカ

元SVR、ロシア対外情報庁のトップエージェント

敵国工作員の尾行中、敵特殊部隊に見つかり窮地に陥るも佐藤が救出、佐藤の家にケガが治るまで匿われていた

アレフティナが匿われていた佐藤の家が敵特殊部隊に特定されると襲撃を受け、佐藤がアレフティナを庇い瀕死の重傷を負う

その後直ぐに帰国、SVRを辞めると再び日本に訪れ佐藤の家に転がり込み付き合いはじめ

その1年後、佐藤と結婚しルカ・アレフティナから佐藤アレフティナへと性が変わる
ロシア人の例に漏れず酒に強く佐藤と同レベルで2人で飲むと終わりが見えないらしい

進撃の中北韓特殊部隊

「こちらブルーリッジ。敵戦力増大中、対処が追い付かない」

『了解。対策を取る。出来る限り敵戦力を削れ』

伊丹達来賓の泊まっている旅館の裏山に展開していた特戦群とシールズチームは中北韓の特殊部隊の数の多さに押されつつあった

3国の特殊部隊はそれぞれ三方向から襲来しており、特戦群とシールズ合同部隊の一方的な攻撃で戦力を減らしながらも旅館へと近づいていつている

また、3国の特殊部隊は進撃スピードがあまり変わらずそれぞれの対応のため日米合同部隊は戦力を分散させているため、戦力が手薄な所を突かっていた

ブルーリッジことマイケルはそれを上に報告、上に対策を任せ自分は敵の対応に専念することにした

マイケルは木の上でサイレンサー、ダットサイト、フォアグリップ等のカスタムパーツの着いたM4A1を構えた

ダットサイトの中心に中特殊部隊隊員の頭を捉えると引き金を引き、反動を肩で受け止める

頭部に銃弾を受けた兵士は地面に崩れ落ち、それを確認する前にマイケルは新たな標的に照準を定める

次々と倒されていく中北韓特殊部隊だが、それでも前進を続ける

日米合同部隊は後退しつつ猛攻を仕掛けるも中北韓特殊部隊の進撃を止められずにいた

「全員戦闘配置。中北韓特殊部隊が接近中、来賓には指一本触れさせるな。海未は狙撃、ことりはその支援を」

「分かりました、狙撃で支援します。ことり、周りのことは任せましたよ」
「まかせといて」

「絵里、希、穂乃果は俺と裏山に面した中庭の警戒、にこ、真姫、凜、花陽は正面の警戒を。さあ行動開始！」

特殊部隊の襲来を知らされた佐藤は嵐の面々に命令を出し自身も戦闘に備えていた
M4A1を念入りにチェックして自室の窓際で伏せて待機する

隣には事前に渡しておいたMP5SD6を構えPSSをホルダーに差したアレフ
ティナが並んでいる

が、アレフティナは戦闘に積極的な参加はせず来賓の近くで来賓を守る近衛としての
役割を担っている

が、その来賓の部屋からロウリイがハルバードを抱えて飛び出してきた

それを見た佐藤は舌打ちをした

「ちっ！飛び出しやがって！」

「どうするの？ 峯」

「仕方ない、援護する。アレフティナは来賓の居る部屋に！」

た そう言い残すと窓越しに敵特殊部隊員を撃ち、窓から外に出て近くの物陰に姿を隠し

佐藤の存在に気付き1人は佐藤の隠れる物陰に手榴弾を投げ込もうとする

が、その隊員の頭を海末のM700から放たれた銃弾が撃ち抜き絵里、希、穂乃果が
部屋から銃弾を放ちながら出てきて佐藤と同様に物陰に隠れる

佐藤と3人はアイコンタクトを取ると希が背中から大型の銃を取り出した

希の取った物はマインスロアーと名付けられた希自身の開発した兵器である

骨組のみのフレームに肘までを入れ、腕を伸ばして撃たなければならないと言う規制

があるため室内など狭い場所では使えない

だが、希開発の小型爆弾を弾として打ち出し命中から2秒後、爆発する
小型とは言え人を木っ端微塵にする程の威力を持つ

さらに弾薬には命中した目標にガツチリとくつつく機能も備わっている（佐藤でも引き剥がすのは困難）

そんなマインスローアを次々と撃つ希

それを喰らった兵士は爆散して行く

佐藤もM4A1で頭を撃ち抜くが、肩に1発の銃弾を喰らった

が、特殊部隊の反撃はそれまでで後はなす術なく全滅した

宿からの逃走

「おお、敵さんバンを残してくれてるじゃないか。真姫、どうだ？」

「トラップは無し。使えるわよ」

「じゃあ、悪いけどバンの中でこの傷見てくれ」

2台のバンにそれぞれ乗り込む

運転は絵里に任せ先程の傷を真姫に治療してもらう佐藤

真姫は嵐の中でも衛生兵の役割を担っていてケガの処置はことりと真姫に一任されている

後部座席で処置を受ける中、2台のバンは高速に入った

既に泊まっていた宿には公安が駆け付けて遺体の処理を行っている

武器は庭園周辺にまともまっているので回収は楽だったらしい

合同部隊は特殊部隊壊滅後に素早く撤退し基地へと戻っている

が、佐藤には一つ気掛かりな事があった

「なぜ敵さんはあの旅館に泊まるって分かったんだ？ 今日急遽決まったんだが」

「それも不思議やね。けど、答えは分かるんじゃない？」

そう希が言うと佐藤の持っていたスマホから着信音が鳴る

「はい。どちら様で?」

『シックススマンは?』

「幻」

『…………… どうも共産党が情報を流してるみたいです。今緑間さんと高尾くん、あと

小林さんも制圧に向かっています』

「分かった。ありがとう」

スマホをしまつてみんなに情報を伝える佐藤

「つまり、共産党が情報を流して来賓を誘拐させてその来賓と引き換えに門の管理権を

奪い、それをネタに共産党は政権を転覆させる計画だったのね」

「ああ、黒子の調べで分かった。にしても良く情報が来るってわかったな、希」

「カードがそう言ってたんよ」

「けど、その共産党はどうするの?」

「まあ、緑間達が制圧に動いてるらしいから大丈夫だろ」

バンはパーキングエリアに入った

佐藤の怪我の処置は既に終わっていた

「真ちゃん、行けるか？」

「高尾、もう準備はとつくに出来てるのだよ」

「じゃ、行きませ。裏切り者を驚かせてやりましようか」

共産党本部の入っているビルの屋上でラベリングの体制を取る3人の男

高尾和成、緑間真太郎、小林速人は嵐の隊員で情報を流している共産党へと突入しよ

うとしていた

公安も待機し、決定的な証拠も押さえてあるので後は確保するだけである

ビルの外壁を下っていく3人

3人はタイミングを合わせてビルの壁を蹴り、ガラスを突き破って中に入った

「動くな!!」

「既に証拠は押さえてある！無駄な抵抗は止めろ！」

3人が突入したすぐ後に公安もドアを破って入りその場にいた共産党の主要議員を確保した

次の日、新聞のトップは『共産党情報漏洩、特地の情報を中北韓に流す』となり主要議員が逮捕された共産党は、消滅した

〈予告編〉

佐藤失踪!

唯一の手がかりは中東での目撃情報

中東の紛争地域に突如現れた二足歩行兵器

見え隠れするアメリカの影

佐藤は一体中東で何を?

佐藤を追って嵐は中東へ

語られなかった嵐のもう一つの話

GATE―自衛隊特殊部隊『嵐』隊長、彼の地にて斯く戦えり―のOVA！
陸上自衛隊特殊部隊『嵐』、世界にて奮闘す
近日公開！

東京湾事件

洋上を飛行するOH1偵察ヘリコプター

柳田の掴んだ情報を元にアルヌスに最も近い海を偵察飛行していた

あの後新たに情報が入りアルヌスに近いところに門を開くと言う事だったためアルヌス近海に的が絞られた

「何も無いですね」

「情報がデマだったのか？」

「おい！あれ見てみる！」

後部座席のパイロットが水平線上の影に気付き偵察サイトで撮影する

その映像を見たパイロット達は絶句した

「おいおいマジかよ」

「でけえ！陸上の門とは比べ物にならねえぞ!？」

「あれならかなり大型の船も通れるな。とりあえず帰還しよう」

二人の任務は門の発見のみ

その任務を果たした今、ここに留まる必要は無かった

門の周囲には木造の軍艦らしき物も見られる

門発見の一報を受けたアルヌスではアメリカ海兵隊のAV8BハリアーIIが飛び立っていた

海兵隊はついこの前特地入りしていて、特地で従来通りの戦闘行為を行った際の問題点の洗い出しを目的に発進した

ほんの数分で到着した12機のハリアーIIは破壊を振り撒かんと帝国軍艦隊に襲い掛かった

まず6機がAGM84ハープーン対艦ミサイルを発射した

いきなり飛んできた物体が船に突っ込み、爆発したのだ

それだけで艦隊はパニック状態になった

ハープーンを搭載していない残りの6機についてはレーザー誘導爆弾を搭載している

その6機が艦隊上空の高い高度を飛行しつつ爆弾を投下した

レーザー誘導された爆弾は外れる事も無く全弾がキレイに命中、船を木っ端微塵にした

門は東京湾に繋がっており、大騒ぎとなった

まさに出航しようとしていた護衛艦あきづき、てるづきが急遽停止、艦首に搭載され

たMk45 5インチ速射砲を門に向けて発射用意をしていた

その場にいた海自ダイバーがとっさに門内の海底がどの程度なのかを調べた結果、かなり深く艦艇の通過が可能であると判明した

その報告を元にあきづき、てるづきは任務が変更され訓練航海という元の任務から海上に出現した門の向こうの安全確保となった

機関を始動させ門の向こうに到達した2隻は多くの帆船を見つけ、それが帝国軍艦であると分かり次第砲撃した

Mk455インチ速射砲は37kmと言う長射程を持ち、1分間に最大20発の砲弾を敵に浴びせる事ができる

また、搭載された高性能20mm機関砲はblock1で水上目標にも対応可能となっている

2隻にそれぞれ1基ずつ装備されているMk455インチ速射砲は砲弾を次々に打ち出している

その砲弾は外れる事も無く帝国軍艦に命中、海の藻屑と変えていった

ものの数分で帝国軍艦隊は壊滅し護衛艦2隻のみとなった

後に東京湾事件と呼ばれる事件は終焉を迎えた

因縁

「もう！何なのよこの大渋滞！」

「まあこの渋滞の中じや迂闊に手出し出来ないだろうから安全つちや安全だな」

「でも、これはちよつと」

「花陽の言う事ももつともだな」

運転する真姫の愚痴を聞き流しつつ助手席でHアップマンに火をつける佐藤

(……………まさかここまで集まるとはな)

伊丹の元嫁である梨紗がネットに情報を流した結果、大勢の人々が銀座に集まったのだ

流星の中韓北特殊部隊もこれでは手出し出来ない、そう踏んだのだが甘かったようだ
すぐに銃声が聞こえてきた

「チツ！あいつらアホか!?民間人でも関係ないって事か！全員下車！戦闘用意！」

「ウチが先頭行くで！」

佐藤達はバンから飛び降りると伊丹達の乗るバンに近づいた

「伊丹！お前らは来賓の安全確保を第一！敵が来たら遠慮するな！」

「了解です！」

「栗林！前みたいに突っ込むなよ！」

「しませんよ!？」

佐藤は全力疾走で希達に追いついた

ハンドサインで自分が先頭を務めることを合図するとゆっくり、しかし急ぎつつ銀座交差点に向かった

何故か銃声はすっかり無くなっていった

「なんやこれ……………」

「全……………滅？」

「何があったのよ」

銀座の門前で見たのは大量の遺体だった

壁に寄りかかるような体勢の兵士に近寄ってみる佐藤

まだ息があるようだ

佐藤は装備から韓国特殊部隊員であると判断して韓国語で喋りかけた

「おい！何があった？」

「か、韓国人か？」

「な訳ないだろ？陸自だ」

「そんな韓国語が上手い自衛隊員、居たのか」

「ああ。で、何があつた？」

「よく分からない。いきなり男が現れて、そこからは一方的な虐殺だった……………ア
イツだ！」

韓国特殊部隊員の指差す先には一人、男が立っていた

「佐藤…………… 峯一イイイイイ!!」

「お前…………… 亜門羅刹!? ガハツ！」

その男、亜門羅刹は佐藤を見るや瞬間的に佐藤の目の前に移動、首を掴み佐藤を持ち上げた

「デメエ、何しに来たア！」

「貴様を、殺しに来たアアア!!」

「ぐおっ！」

とつさの事で反応できない嵐メンバーを尻目に亜門は佐藤を地面に叩き付けそのまま引きずり回す

佐藤も負けてばかりはいられない

亜門の腕を掴むと骨をへし折った

骨を折られて力が一瞬抜けた隙を狙って脱出した佐藤は亜門に全力のボディープ

ローをお見舞いする

「おらあ!!」

「グハッ!」

RP G7やジャベリンの直撃に耐えうる装甲ですら叩き割る佐藤の一撃を喰らってなお亜門は立ち続けていた

だが、その顔には既に限界が見えている

口からは血が垂れているが、それは佐藤も変わらない

援護射撃しようとする嵐メンバーも、凄まじいスピードで移動する亜門を捉えることは叶わなかった

2人の拳がそれぞれ相手の頬にヒットする

「やる……………じゃねえか」

「貴様を……………殺すまでは……………我は……………倒れん」

お互い膝をつくど、亜門は消え佐藤はアスファルトに倒れ込んだ

「峯一! ねえ峯一 ってば!」

「穂乃果どいて! 希! 声掛けて!」

「峯一!?! 大丈夫やからな!?! 気いしつかり!」

そんな声を聞きながら、佐藤は意識を手放した

亜門羅刹

『目標地点まであと3分です』

SH60シーホークの機内にパイロットの声が響く

機内に居るのは2人のパイロットと1人の男のみ

男は後部で葉巻を吸っている

その男、佐藤峯一が乗るシーホークはイラク上空を飛行していた

P KO活動の為イラクに派遣された陸上自衛隊の宿营地があるエリアを含めるイラク各地にて武装勢力による大規模な攻撃が開始されたのだ

アメリカ軍やイギリス軍、ドイツ軍など各国軍が大きな被害を出し陸上自衛隊も宿营地が攻撃を受けやむなく小火器により反撃するという事態に陥っていた

この際銃撃戦になり自衛隊員数十名が重軽傷を負った

状況は悪化の一途を辿った

アメリカ軍基地の一つに日本人30名が収容されているが、この基地が激しい攻撃を受けているのだ

日本政府も対応を迫られ遂に武力行使による日本人救出を任務とした部隊を編成、到

着したのだ

この部隊は10式戦車や90式戦車などの重装甲車両も含まれている

また、海上自衛隊からあたご、あきづき、いずもが増派された米艦隊と共にイラク近海に展開し火力投射による支援を行う事になっている

航空自衛隊もF4EJ、F2を派遣し地上部隊を支援する

佐藤峯一に課せられた任務は攻撃を受けた宿営地の自衛隊員達を指揮、死守せよとの事だった

到着したシーホークから飛び降りると現地の司令官が出迎えた

「陸上自衛隊特殊部隊嵐所属、佐藤峯一 尉です」

「陸上自衛隊イラクPKO派遣部隊司令官、久我吉武 一尉です。こちらへ」

2人は司令部に入った

机の上には地図が広げられていた

「状況は？」

「ここが我々の今居る宿営地です。ここにオランダ軍基地があります。で、ここが日本人が収容されているアメリカ軍基地です」

そんなやり取りをしていると無線機から声が聞こえた

『正面に武装勢力多数！降伏勧告をしています！』

「全員戦闘用意！佐藤一尉、申し訳ないが前線指示を頼みます！」
「分かった！」

佐藤は装備を整えながら全力疾走する

今回陸上自衛隊であることを明確にするため89式小銃に9mm拳銃を装備している

佐藤が到着した時には既に激しい戦闘が始まっていた

「全員お互いをカバー！ミニミ制圧射撃しろ！敵に撃たせるな！」

その声に反応した射手がミニミ軽機関銃を伏せ撃ちの体勢でフルオート射撃を開始する

武装勢力は薬のせいで多少撃たれても突っ込んでくる

その狂気とも取れる行動に自衛隊員達は戦慄する

「耐えろ！もうすぐ味方が来る！」

そう佐藤が叫んだ時だった

『遅れてすまない！これより援護する！』

「はっはー！来やがったな！」

護衛艦いずもより飛び立ったAH64D、アパッチロングボウが機首の30mmチェーンガン武装勢力上空をフライパスしながら掃射する

飛来したF2からはJDAMが投下されあたごからは艦砲射撃が始まった
そんな大量の砲弾や爆弾が降ってきた武装勢力は数分もせず全滅した

「……………病院か？」

「起きたのね？」

佐藤が目覚めると病院のベッドの上で、隣にはアレフティナが椅子に座っていた。嵐の皆は門の向こうに戻ったわ。あなたも明日には戻れるらしいわよ」

「そうか、ありがとう」

「ふふっ、珍しいわね？ここまでやられるなんて」

「しょうがないな。相手は亜門羅刹だったからな」

亜門羅刹

神室町のマンホール内から悲鳴やうめき声が聞こえ、調査に入った警察官2人が惨殺されるといふ事件が起きた

このマンホールから入れる地下空間は武器密売組織ブラックマンデーの研究所となっていたのである

そのブラックマンデーの生み出した生物兵器Tウイルス改が漏洩、研究所全体に広がり感染者がゾンビとなった

佐藤はこの時対バイオテロ部隊B S A Aと共にマンホール内の制圧作戦に参加した

佐藤がとある通信所を制圧した際、相手が

「^{スプーラー}銃は地下30階に到達」

と話した

更に通信手の胸には放射線測定用のフィルムバッチが付けられていて、近くにあったダンボールの中にも大量のフィルムバッチがあった

佐藤は驚愕の事実をこの時知った

—ここに、核が運び込まれた!?

地下30階に到達するとミサイルハッチがあり、そこに居た男こそ亜門羅刹だった
苦戦しながらも倒し、コントロールパネルを操作して核ミサイル発射を阻止した

この事件は後に神室町アンダーグラウンド事件と呼ばれる事になる

「とりあえず、今日はゆっくり休むのよ?」

「ああ。分かっている」

次の日、佐藤は門をくぐった

ルーントルーパーズ編

始まりの航海

「マリースア南海連合王国……………ですか？」

アルヌスに築かれた要塞中央の建物内にある狭間陸将の部屋で佐藤はその言葉を口にした

「うむ。マリースア王国は帝国の直属国的存在であるフィルボルグ継承帝国と国交が悪化しているらしい。味方は多いに越した事は無いからな」

「なるほど。我々の任務は？」

「まず偵察し、その後高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応せよ、だ」

その任務を聞いた佐藤は思わず吹き出した

「なんですかそれ？要するに行き当たりばったりですか？」

「まあ、そうだな。特装輸送艦『きい』に搭乗し出発してくれ。部隊の編成はこのリストに載ってるから確認してくれ」

狭間陸将から渡されたリストに視線を落とす

マリースア南海連合王国派遣艦隊

旗艦

いぶき型イージス護衛艦いぶき

特装輸送艦きい

いずも型護衛艦やしま

おおすみ型輸送艦しもきた、くにさき

ましゅう型補給艦しだか

と書かれていた

「最新鋭のイージス護衛艦を投入ですか。まるで海外派遣艦隊ですね」

「その通りだ。第2次南アフリカPKO派遣に先立ち特地で連携の確認などをする為に今回派遣する事になった。その為陸自部隊も多くの最新兵器を持ち込む」

そこまで言うかと狭間陸将は一息置いて小声で続けた

「実はな、今回派遣艦隊の旗艦となったいぶきにはとんでもない秘密がある」

「と、言いますと?」

「いぶきにはタクティカルトマホークが搭載されているのだよ」

佐藤は驚いた

タクティカルトマホークは巡航ミサイル

侵略兵器に該当するので自衛隊では配備しない事になっているからだ

「大丈夫ですか？それ。ちゃんとした理由があるんですね？」

「時代が変わりそうになつてから搭載されたのだ。北朝鮮は国民を餓死させそうになりながらも巡航ミサイルを配備している。例えばイージス護衛艦やPAC3、イージスアシユアが頑張ろうと防ぎきれなくなる。だから……」

「トマホークで巡航ミサイル発射基地をピンポイント爆撃し破壊するのは専守防衛の範囲内、と言う事ですか」

「そうだ。それにきいにも巡航ミサイルが搭載されてるし問題無いだろう？」

「きいは存在自体が最高機密ですよ？だからあんな重武装が許可されたんです」

はあ、とため息をつきながら佐藤は言う

特装輸送艦『きい』とは嵐直属の輸送船である

重武装、重装甲ながら高いステルス性を確保すると言う無理難題を嵐の技術で実現したのだ

存在自体が最高機密で存在しない事になつているのは1ー式長距離巡航誘導弾と言う巡航ミサイルと、61cm3連装70口径砲を搭載するなど専守防衛の為の艦とは言えないからである

外見は米海軍のドック型輸送艦サン・アントニオ級に似ているが、性能はきいの方が大きく上回っている

LCACの搭載、運用は出来ないが船尾にある飛行甲板からF35Bが飛び立つ事が出来る

「マリースア王国救援作戦は『オペレーション・メロス』と命名された。作戦開始は明日5:00の艦隊出発と同時刻とする！貴官の活躍を期待する！」

「了解！」

翌日、艦隊は出発した

「青い空！青い海！白い雲！いい風だね〜！」

「おう。テンション高えな穂乃果」

「良いじゃん峯一！」

「私達乗組員も、周りの船に気にせず航海できて楽しいよ」

「久しぶりだな、詩織」

艦橋と直通の張り出しでHアップマンを吸っていた佐藤とはしゃいでいる穂乃果に声をかける者がいた

田中詩織

佐藤がスカウトして来た隊員で、その目に狂いは無かった

海自訓練で歴代最高を叩き出し、米海軍にもスカウトされる程の能力を持っている

「ふふふふ、周りは帆船だらけ。てことは体当りしても問題無いよね〜?」

「おい、それは止めろよ?」

「分かっているって〜、しつかりC I W Sで対応するよ〜」

「絶対分かってないだろ!?!」

この通り、佐藤でも手を焼く事がある

「まあ良い。マリースア王国とやらまで何日だ?」

「良くないけどね!?!」

「このまま行けば5日だよ。何か障害があれば分からないな〜」

「分かった。安全な航海にしてくれ」

そう言い残して佐藤は張り出しから降りていった

「レーダーに感ありつてのは本当か？」

「私達を疑ってるの？接近中よ。もう直ぐ見える」

艦内放送で飛行物体が接近している事を知った佐藤は艦橋に駆け上がった

「で、どうするの？」

「ここは戦闘艦。その指揮は艦長に従う事にしてるが？」

「…………… 了解、対空戦闘用意。隊長は張り出しにあるM2について」

対空戦闘用意が発令される中、佐藤は張り出しに出て備えられているブローニングM2重機関銃のハンドルを引き、装填する

「さあ、何が出る？鬼か？それとも導きの鳥か？」

佐藤は楽しそうに笑いながらそう言う

すぐに飛行物体は見えた

「詩織、飛行物体視認！ワイバーンみたいだが、少年…………… いや少女が乗ってる！」

恐らく哨戒だ」

「了解。蕪木司令に繋いで」

「了解です」

そう部下の一人が返事をするやとすぐにいぶきに繋がった

『こちら蕪木』

「詩織です。飛行物体視認、ワイバーンの模様。少女が乗っており恐らく哨戒との事」

『了解。こちらからは手を出すな。それがマリースア王国の者だったら目も当てられないからな』

今回のマリースア南海連合王国派遣艦隊の旗艦はいぶきであり、司令官は蕪木海将補である

その為いくら嵐直属の輸送船と言えど勝手な行動は出来ない

佐藤がいぶきの方を見ると張り出しに多くの人の姿が見て取れた

その中には主席幕僚の加藤二佐の姿もあつた

程なくしてワイバーンらしき鳥は去っていった

「これで艦隊がお出迎えとか洒落にもならんな？」

「大丈夫でしょ。情報を見る限りマリースア王国にそんな国力があるとは思えないから」

詩織は事前を集められたマリースア王国に関する情報を把握していた

マリースア王国はフィルボルグ継承帝国との海戦でほぼ全ての海軍艦艇を失っている

フィルボルグ継承帝国にもそれは言えるのだが

そしてこのマリースア王国は特殊な国で、特地語ではなく日本と同じ言葉を使うのだ
フィルボルグ継承帝国も日本と同じ言葉を使う為、意思疎通が他より簡単である

その為第1次南アフリカP K O派遣と同じ人材が派遣された

「南ア派遣訓練なんて、特地ですんじゃねえよな」

「しようがないでしょ？他に出来ることなんて無いんだから」

「南アP K Oは実戦も視野に入れて考えてるらしいしな」

「でしようね。じゃないとトマホークなんか搭載しないでしょ？南アじゃ米軍と共同でトマホークの最大射程での発射試験も出来る。おまけにマスコミも居ないからピツタリね」

いぶきは南アに到着後アメリカ軍と共同で訓練を行う事になっているが、この訓練内容は極秘だった

表向きには弾道ミサイル迎撃訓練で模擬弾を使って行うため、防衛機密の漏洩があるといけないからとなっているが、実際はトマホークを最大射程で発射するという内容だった

トマホークは戦術兵器に相当する為自衛隊での配備は憲法に抵触する可能性がある
上、政党からの批判もありうる

それでも導入を検討しいぶきで試験を行うには理由がある

北朝鮮の核武装が実戦投入レベルに到達した事である

北朝鮮のミサイル基地をトマホークでピンポイント爆撃、破壊するのは専守防衛の範
囲内である、そう判断されたのである

無論きいは巡航ミサイルを搭載しているので最悪ピンポイント爆撃で破壊する事が
可能である

「詩織、自室に戻ってるから何かあったら呼んでくれ」

「分かった」

そう言い残して佐藤は艦橋から降りていった

飛べ、久世小隊

「お久しぶりです！佐藤一尉」

「おう！久しぶりだな、久世」

やしま艦上に待機する3機のUH60ブラックホークの前で大声で話す2人

2人の内1人は佐藤だがもう1人は久世啓幸3等陸尉

音ノ木坂騒動の時佐藤と共に音ノ木坂学園を死守した久世小隊の隊長だ

そんな久世小隊は偵察任務を帯びてマリースア王国へと向かう

その久世小隊に佐藤が同行する事になった

「じゃあ行きましょう」

「いぶきから連絡です。シーホークが1機同行する事になりました。加藤二佐が搭乗するそうです」

「了解だ」

3機のブラックホークにそれぞれ分乗すると飛び立ち、艦隊上空を旋回しシーホークが上がつてくるのを待つ

程なくシーホークが編隊に合流するとマリースア王国の方に向かっていった

「…………… 竜騎士か。ずいぶん豪華なお出迎えだな」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょう!？」

「久世、あいつ我に続けって言ったぞ」

「分かってます。指揮官機のシーホークに伝えたらその指示を受けるそうです」

へり隊を出迎えたのはマリースア王国の者と思われる竜騎士達だった

今回偵察隊の指揮はシーホークに搭乗する加藤の為、指揮官機はシーホークとなっている

その指揮官機から指示を受けろと言われたら受けるしかない

4機は城の中庭と思われる所に着陸した

中庭は大騒ぎになっていた

「久世、一応小銃は置いてくぞ。拳銃は携帯しろ」

「了解です」

「久世くん、行くよー」

呼ばれて外を見ると白い海自制服を着た加藤が手を振りながら待っていた

「加藤、お前と違って陸には色々準備があるんだよー!」

「佐藤にしたら遅いぞ」

ゲシゲシとど付き合う2人

その2人を追いかける久世を含めた3人の前に立っているのはモノクルを付けた女性だった

「生まれ！名を名乗れ！」

「日本国海上自衛隊加藤修二2等海佐です」

「日本国陸上自衛隊久世啓幸3等陸尉です」

「同じく日本国陸上自衛隊佐藤峯一1等陸尉です」

「日本国？陸上自衛隊？」

ナニソレオイシイノ？とでも言いたげに首を傾げる女性の後ろから今度は少女とも言える小さな人がやってきた

「ほほう、面白い！ゆっくり話を聞かせてもらおうかの！」

「陛下!？」

「妾はハミエーア、この国の王じゃ」

その言葉を聞いた2人は固まった

「お、王？国家元首みたいなの？」

「国家元首クラスには捧げ銃だったはず！あ！銃持ってきてない……………」

加藤と久世に替わって佐藤はハミエーアの前に出て話をした

「我々は門の向こうから来ました。現在マリースア南海連合王国はフィルボルグ継承帝国と国交が悪化、開戦待ったなしと言う状況でよろしいですね？」

「うむ。実を言うと数日前に最終通知が届いた所じや。今日中にも戦時体制に入る」

「我が部隊に課せられた任務はマリースア南海連合王国救援です。そちらさえよろしければフィルボルグ継承帝国の侵略部隊を迎え撃ちます」

「ほお、戦力が増えるのは嬉しい。だが、見返りは？」

「特には。日本国とマリースア南海連合王国が同盟関係になる、それが条件です。それさえ可能であれば帝国軍を壊滅に追いやる火力を提供しましょう」

2人が話を進めている間に宴が開かれる事になった

「佐藤一尉、よろしくお願いします」

「おう。行つてこい」

着陸したヘリの護衛部隊指揮のために佐藤は着陸地点に残つた

その佐藤が持つ無線機が鳴つた

「こちら佐藤」

『こちらきい。全速航行で一時間半ほどです。何かあれば火力投射により支援します』
「了解だ。とりあえずの所は良い」

その後は何もなくブラックホークに座つて葉巻を吸つていた

だが、突然見張り員の叫び声が響いた

慌ただしくなる中庭を見て佐藤も行動を開始した

「各員装填！何時でも撃てるように！ためらうな！攻撃してきたら撃て！ヘリパイエンジン始動！何時でも飛べるようにしとけ！おい！」

「な、何ですか!？」

「何があつた？」

駆け回るマリースア王国兵を一人捕まえると事情を聞いた

「フィルボルグ継承帝国の攻勢です！竜騎士団を主力としてるようです！」

「分かつた。ありがとう」

既に城の中にも敵が侵入している様で銃声も聞こえてくる

「チツ！戦闘が………!?応戦しろ!!」

佐藤がM4A1を構えた先には巨大な黒龍が突っ込んできていた

佐藤はM4A1をフルオート射撃するが全て甲高い音を立てて弾かれた

八重樫もフルオート射撃をするがあとの2人はセミオート、しかも数発しか当たらなかつた

黒龍が離陸のためローターを始動させていたブラックホークに覆いかぶさつた

凄まじい音を立ててローターが折れ、ヘリが墜落する

佐藤は咄嗟にヘリパイロットに向けて叫んだ

「行け！離陸しろ！艦隊に帰還するんだ！」

「り、了解!!」

ブラツクホークとシーホークが飛び立つ
久世達が来たのはその直後だった

突撃（1回目）

「発射あー！」

撃墜されたブラックホーク内にあった84mm無反動砲を黒龍に向けて引き金を引く

砲身から飛び出した84mm砲弾は黒龍の口の中に飛び込み炸裂、吹き飛ばした

「佐藤さんは!？」

久世が後ろを見ると佐藤は何事も無かったかのように立って手を振っていた

その後ろには首を切り落とされた黒龍が転がっている

「それ、佐藤さんがやったんですか？」

「おう。それより防衛線作るぞ。敵が来る」

それから久世小隊は城の家具などを使って防衛戦用の点火を作った

フィルボルク継承帝国の者はその家具で作った陣地を見て無様だと嘲笑う者も少なくなかった

だが、その一件見れば無様と思える陣地は別世界で死角なく前方を狙える様に火力配置された機銃陣地と呼ばれ恐れられている事を彼らは知る由もなかった

「あれを相手に持つと思う？」

「さあ、やってみん事には何とも」

「やるしかねえな。きいにも火力支援要請しといたから」

陣地の中で会話する久世、八重樫、佐藤の3人

視線の先にはざっと2000位のフィルボルク継承帝国兵が居た

と、会話していたらどうやら攻撃が始まるようだ

「おいおい、真正面から突っ込んでくるなんて俺等からしたら射撃訓練の的だぞ」

M4A1を構えて笑いながらそう呟く佐藤

「撃てえ!!!」

普段温厚な久世が吠えるように命令を出す

その命令に弾かれたように自衛官達が一斉に引き金を引く

89式小銃やM4A1の発射する5.56ミリNATO弾はアラミド繊維で作られたボディアーマーすら貫通する

佐藤の着ているドラゴンベストも嵐で改良しているから貫通しないが、普通なら貫通してもおかしくないレベルの威力を持っている

そんな5.56ミリNATO弾にとつて継承帝国兵が着ている甲冑は紙同然だった
 バスバスと甲冑に穴を開けて兵士の体に5.56ミリNATO弾が突き刺さり内部を蹂躪する

先陣を切った騎兵隊は次々と落馬、一瞬にして壊滅状態になった

次に彼らは盾を使って飛んでくる銃弾を防ごうとした

だが、盾と言つても所詮は木である

数発受ければ粉々になる

アルヌス防衛戦において木製の盾が9mm拳銃の9mm弾3発で砕け散った事が確認されている

5.56mm NATO弾は5発程で盾を砕き、後ろの兵士を倒していった

小銃など知らない継承帝国兵は着ている甲冑のせいで伏せる事も出来ずに倒されていった

『こちら詩織、61cm砲3発発射。砲弾対地拡散弾。弾着5秒前、注意せよ』

「きいからの火力支援だ！伏せろ！！」

佐藤の叫び声を聞いた自衛隊員達が一斉に家具で作られた陣地の中に隠れ伏せた。継承帝国兵はそれを恐れをなしたと思いついたがその頭上から破壊が降り注いだ。

きいの61cm砲から放たれた対地拡散弾が炸裂したのだ。

対地拡散弾は上空で炸裂、小型の鉄球を無数に地面に向かって降らす。

更に砲弾に詰められた爆薬が爆発する事によって破滅的なスピードで鉄球を撃ち出す。

主力戦車すら喰らえばタダでは済まない威力にとって、中世ヨーロッパの甲冑は無に等しかった。

61cm砲弾から拡散した無数の鉄球は一撃で継承帝国兵達を仕留めた。こうして1度目の突撃は敗北に終わったのである。

嵐 部隊詳細 (後日追加、修正あり)

自衛隊特殊部隊嵐

標語 覚悟せよ 我最強の嵐なり

隊長

佐藤峯一 1尉

隊員

戦闘員

高坂穂乃果 1尉

園田海未 1尉

南ことり 1尉

星空凛 1尉

小泉花陽 1尉

西木野真姫 1尉

絢瀬絵里 1尉

東條希 1尉

矢澤にこ 1尉

小林速人 1尉

緑間真太郎 1尉

高尾和成 1尉

装甲車輛操縦員

西住みほ 1尉

五十鈴華 1尉

冷泉真子 1尉

秋山優花里 1尉

諜報員

黒子テツヤ 1尉

レオン・S・ケネディ 1尉

艦船乗組員

田中詩織 1尉 (本来艦長は1佐だが、特別措置により1尉)

武部沙織 1尉

ラリー・フォルクス 1尉 (戦闘機パイロット)

装備解説

世界中の銃火器を装備している

拳銃や小銃などの小火器から対戦車ミサイル、重機関銃と言った重火器まで幅広く使用する

また、地雷や爆弾においても様々な物を使用する

標準火器はM4A1である

海未はM82などのスナイパーライフル、花陽はAT4などのロケットランチャーを装備している

希はドアブリーチ用爆薬や建物爆破用爆薬、クレイモア地雷なども装備している

穂乃果、凜は標準装備しているナイフとは別に通常より大きなアーミーナイフを装備している

佐藤は日本刀『桜吹雪』を装備している

装甲車輛操縦員、艦船乗組員については9mm拳銃を常時携帯している

防弾チョッキにはインターセプターボディアーマーを元に嵐によって徹底的にカスタムされた防弾チョッキを標準装備している

これにより7.62mm弾の近距離命中にも耐える防御力と動きやすさ等の機動性を両立した

ヘルメットは嵐独自の物で暗視装置やバイザーの取り付けが可能で、小銃弾の命中

に耐える

車輛系の装備品については10式戦車、M1A3エイブラムスが主力戦車として採用されている

隊員の移動に車輛を使う場合はクーガーHE、ハンビー、89式歩兵戦闘車を使うが、市街地などの非戦闘地の移動には市販車を使う

オトマティック対空自走砲、B1チエンタウロも使っている

これら車輛は全て嵐によってカスタムされている

航空機系はF22ラプター、F35JBが必要ならば使われる

UH60ブラックホークを嵐で改造したUH60JSクロウホークを移動用に使っている

MV22BオスプレイやCH53スタリオン、AH64アパッチロングボウもある

C5MスーパーギャラクシーとAC130も1機ずつ装備している

艦艇においては特装輸送艦きいと大型ドック船あかいのみだが、現在原子力潜水艦の計画が進められている

諜報員は拳銃1丁にナイフと言った装備で活動する

嵐製の薄型防弾チョッキを標準装備するが、これには小銃弾を受け止める性能は無く拳銃弾を止める事を目的とされている

活動地域は全世界としており、命令があればすぐさま出動できる

この団結力に嵐の強さの秘密があるのかもしれない

嵐は隊員間の意思疎通がアイコンタクトで済む事が多い

常人ならばどれだけ訓練を積んでも不可能な超速連携を可能とした

声をほとんど使わないアイコンタクトでの連携は例え敵が日本語を分かっていたとしても何を仕掛けてくるのか分からない

アイコンタクトによる意思疎通から繰り出されるハイスピードな連携攻撃は一般的な軍隊の陸軍全軍にも匹敵すると言われている

そんな世界最強の部隊が増援として到着し、継承帝国軍を迎え撃つ準備は完璧になった

「来たぞ。3500は居るな」

「前回は2000だっけ？」

「ああ」

陣地の中から顔を出して継承帝国軍を観察する穂乃果と佐藤
そうして偵察していると角笛の音が聞こえてきた

「久世！」

「分かってます！前回と同じ距離から射撃開始です！」

「そんなこんな言ってる間にもう射撃距離だぞ！」

「射撃開始!!」

佐藤に急かされて久世が射撃命令を出す

嵐の隊員を含めた全員が射撃を開始する

今回佐藤の手にはM4A1は無い

かわりにラインメタルMG3がある

陣地から出て伏せ撃ちの体制になる佐藤

「遠慮するなよ？腹一杯弾喰らえっ！」

顔に笑みを浮かべながらそう言うと佐藤は引き金を引いた

毎分約1000発発射できるMG3はその圧倒的な連射力を遺憾無く発揮した

真つ直ぐ一直線に並んで突撃してくる継承帝国兵を落ち葉を掃く様に一掃する
継承帝国兵はMG3にとつては良い的だった

弾薬が切れると佐藤は手早く弾倉を交換し、銃身の交換も行う

MG3の銃身は嵐によって若干の改良が施されているが弾倉1個分、120発もの銃弾を連射するとどうしても交換の必要が出てくる

佐藤は加熱した銃身をマツトの上に置き、かわりの新しい銃身を入れる

ここまでの一連の動作には30秒と掛かっていない

その動作を繰り返しつつ射撃する

戦闘が始まって数分経ったが自衛隊は押されつつあった

「チツ！流石にこの数はキツいな！久世！スナイパーに上から援護させよう！こっちからは海未を出す！」

「了解です！市ノ瀬！何処か高台に登って援護！園田1尉と行け！」

「了解！」

「行きますよ市ノ瀬！」

2人はラロナの先導で走り出す

3人は程なく高台へと辿り着いた

「（い）だ（い）（い）なら見渡せる！」

「これでは、誰を狙えば良いかわかりませんね」

市ノ瀬と海末の2人はスコープを覗き込んで見るが誰を狙ったら良いのかよく分らない

「あそこだ！軍旗を持った従卒がいる。隣のマントを羽織っているのが騎士隊長かも！」

ラロナが指を指す方を見ると確かに旗を持った兵士がいた

「よ、よくこの距離で分かったな」

「山育ちだかんな！」

「市ノ瀬はあのマントを羽織った騎士隊長を、私はその隣の軍旗を持った従卒を狙います。外さないでくださいいね？」

「分かっています！」

海末はバレットM82を構える

2人は少し狙いを定めると、引き金を引いた

市ノ瀬の対人狙撃銃から放たれた7.62ミリ弾はマントを羽織った騎士隊長に命中した

命中した騎士隊長はその場に倒れ転げ回っていたが担架で後方へと搬送されていた

その隣では旗を持っていた従卒の上半身が吹っ飛ばされ旗が転がっている

2人とも槓桿を引き次弾を装填する

「お、お前らこの距離から当てたのか!？」

ラロナが驚きの声を上げる

「一応、準特級射手だかん」

「私達の隊長からしたら、この程度の距離はスコープを使うまでもありませんでしょうね」

佐藤はスコープの着いていないレミントンM700で600m先の敵兵の頭に命中させた事がある

また、M4A1でも数百メートル離れた敵兵をアイアンサイトでヘッドショットする事ができる（できると言うかやっている）

「しかし市ノ瀬、あなた準特級射手になつていたのですか？訓練した時からセンスは感じていましたか」

「一応、真面目に訓練受けてますから。ゲーセンで鍛えた腕もバカに出来ないですよ！」
市ノ瀬は狙撃手としての訓練を受けている時、特別指導官として招かれていた海未に才能を見抜かれ特別指導を受けた

それによって市ノ瀬は狙撃手として大きく成長した

その時

「センスが良いですね。何処か、弓道とかで鍛えましたか？」

と言う海未の質問に対して市ノ瀬は

「学校帰りに寄つてたゲーセンで鍛えました」

と回答されてビックリした海未だった

その市ノ瀬はスコープを覗き込んでいて何かに気付いたようだ

「ん？何で旗を拾つたんだ？」

「旗は部隊の象徴。旗が倒れた時は部隊が壊滅したつて事を表すんだ。特に帝国はそうらしい」

それを聞いた海未は何かを閃き市ノ瀬に指示を出した

「市ノ瀬、あの旗へし折っちゃってください。何時までも拾われるのは面倒ですし、旗が折れれば部隊の士気も下がるでしょう」

「了解！」

そう言った市ノ瀬はスコープを覗き、数秒後引き金を引いた

旗を拾った従卒が被弾の衝撃で倒れ、旗を見つめていた

旗は棒の中心からポツキリ折れ、無くなっていた

「やっぴい！」

「良い腕ですよー！」

「流石、ゲーセンで鍛えた腕だな！イチノセ！」

パンパンと肩を叩いてくるラロナ

2人は見合わせて

（絶対ゲーセンの事矢の訓練施設かなにかと間違えてますよね？）

（……………でしようね）

ま、まあいつか

そう切り替えた2人はラロナが見つけた標的を次々と撃ち抜いていった

洋上の無双と車列の秘密

「ふう、何とか凌いだな。狙撃手の働きが大きかったな」

「良いんじゃない？ 私達がその分楽できるし」

「ところでここ、お前小さいから敵の前に立つても攻撃当たらないんじゃないや」「うっさいわね！！」痛ってえ！！」

2回目の突撃を防いだ自衛隊

佐藤はにこの身長をいじって蹴り飛ばされていた

そんな和やかな雰囲気に含まれている防衛陣地

その頃海ではいぶきが圧倒的な力を見せつけていた

きはいぶきより後方に位置していて対地支援を担当していた

「艦長、いぶきの攻撃により敵竜騎士編隊は全滅です」

「流石イージス艦。こりゃ、負けてらんないね」

きい艦橋では部下からの報告を受けた詩織が笑いながらそう漏らしたと、そこに声が上がった

「艦長、ならばいぶきに接近中の竜騎士団を我々が引き受けましょう。この世界の竜騎士相手に本艦の主砲が有効かどうかも見たいですし」

「宜しい。対空弾装填。いぶきに通達後、発射する。砲雷長、発射のタイミングは任せろ」

「了解！」

丁度よくいぶきに接近中だった竜騎士団は哀れにも標的になってしまった

自動化された61cm砲に赤く塗られた砲弾が装填される

この赤く塗られた砲弾は11式対空砲弾

旧帝国海軍の三式弾の様な物だが、一言で言ってしまうえば対地拡散弾の対空版である

そもそも対地拡散弾はこの11式対空砲弾を改良して作られた物であり、バリエーシヨンの1つとして数えられる事もある

実戦投入時にはきいを爆撃しようとしたSu30の10機編隊を一撃で葬り去つて
いる

そんな物が竜騎士団に向けられればどうなるか

「発射！」

砲雷長の号令で射手が引き金を引いた

それは電気信号となつて主砲に伝わりと雷管を作動させて砲弾を打ち出した

火薬によつて加速された砲弾は竜騎士団の鼻先で炸裂、一瞬にして壊滅させた

鎧も着ていた、が、砲弾から出た鉄球はいとも容易く貫通し命を奪つていった

その光景は地上の継承帝国兵に恐怖を与えた

指揮官のリヒャルダですら恐怖を覚えた

壊滅したのは精鋭と称される竜騎士団だった

その竜騎士団を一撃で、遙か彼方から葬り去つたのだ

しかし、継承帝国に撤退は許されない

残つた兵達はリヒャルダ指揮の下城へと進撃する

だが、先程までとは明らかに違う

その足取りはとても重かった

ここはアメリカ、カリフォルニア州にある砂漠地帯

そこにある1本の道を車列が走行している

大引越しも思えるが、先頭車両が戦車である時点で普通の車列ではないと気付くはずだ

先頭車両であるのはM1A3エイブラムス

スモークグレネード弾発射機が8個1組となっているのでアメリカ海兵隊の車両でTUSK2が取り付けられている

その斜め後ろには2両のストライカーCVN装甲車が後を走っている

ストライカーCVNは2両ともプロテクターM151が設置され、M2重機関銃が取り付けられ、スラットアーマーも装備されている

それぞれ9名ずつ完全武装のSEALs隊員が乗り込んでいる

まだその後ろには2両のストライカーが走っているが、外見が異なつた

車体上部に105mm戦車砲を搭載した機動砲システム、ストライカーMGSである

このストライカーMGSもスラットアーマーを装備している

ストライカーMGSの後ろを行くはハンヴィーが7両

OGPKにMk19自動擲弾銃を装備した車両が2両、OGPKにミニガンを搭載した車両が2両、アベンジャー対空システムを搭載した車両が2両、OGPKM2重機関銃を搭載した車両が1両だ

その中央にはMTVRが走っている

そのトラックの後ろに行くハンヴィーでは運転席の男と助手席の男が話していた

「しっかしまあ、エイブラムスにSEALsの護衛とは大したもんだな。更に増援として凄腕のエージェントまで送られてきてる。そんなに襲撃が怖いのか？上の連中は」

「だろうな。何せテロリストの装備が強化されてきてるらしいから。イラクじゃエイブラムスもテロリストに鹵獲されてる可能性があるから、派手なパーティーを開けそうじゃないか」

そう言う助手席の男、レオン・S・ケネディは嵐の諜報員の1人である

レオンは単独潜入を得意としサバイバル能力も高いうえ、戦闘力も高い

主力戦車や装甲車、特殊部隊に嵐の諜報員が護衛するこのMTVRは後方の2輪が無
限軌道に交換され荷台は鉄製の囲いが付けられ外からは中を見る事が出来なくなつて

いる

後方には重々しい扉があり、中身を守っている

「緊急時にはF22やブラックホーク、オスプレイも海兵隊やグリーンベレーを満載して飛んでくるんだが、それでも油断出来ないな。襲撃なんか受けたら泣けるぜ」

「そりゃあそうだろう。何てったってこのMTVRの積荷は――」

「デイビークロケット20発とSADM5発なんだからな」

デイビークロケット

冷戦期、NATO軍に比べ圧倒的な数的優位を誇っていたワルシャワ機構軍に対する抑止力として開発された、歩兵部隊が運用できる手軽な核弾頭として開発された

SADMは正式名称で特殊核爆破資材と呼ばれる

その特徴は大きさにあり、通常の核兵器よりもかなり小型化されていてその小ささからスーツケース型核爆弾や超小型核爆弾とも呼ばれる

2つとも冷戦の終結と共に退役しているが、近年まで保管されていた

が、廃棄作業が始まり今回が最後の両兵器なのだ

その核兵器を運搬するMTVRは放射線漏れの無いようにしっかりと密閉されている

レオンが横を見た事で異変に気付いた

土煙が上がっているのだ

レオンはすぐ双眼鏡を取り出して観察する

ごく一般的なSUVDだが、運転席の男と助手席の男2人ともバラクラバを着けている
明らかに民間人では無い

「おい、8時の方角に不審車。恐らくテロリストだ。バラクラバをしてやがる」

「マジか。全車に通達！テロリスト共のお出ましだ！」

レオンの報告を聞いた運転手は無線機に向かって叫んだ

対応したのはストライカーMGSとレオンのハンヴィーだった

M2がSUVに向けて火を吹く

距離がある上双方高速移動しているのでなかなか当たらない

しかし、そのM2はただの囷だった

M2を避けている間にストライカーMGSの105mm戦車砲が砲撃用意を整え照準を合わせ砲撃した

高性能な管制装置の効果もあり105mm砲弾がSUVに命中、吹き飛ばした
「命中！ざまあ見やがれテロリスト共め！」

「まだだ！警戒を緩めるな！」

そう叫ぶレオン

その言葉通り戦いは始まったばかりであった

決着と交渉と

「!!RPG!!」

「クソオツ!!」

レオンの叫びに反応して運転手が急ブレーキで辛くも回避する

が、横にいたアベンジャーシステム搭載型ハンヴェーが吹き飛ばされた

そのRPGを放ったピックアップアップに対して応射としてM1A3エイブラムスの120mm滑腔砲が火を吹いた

湾岸戦争に初投入されたM1A1エイブラムスはイラクが配備していたソ連製戦車に比べ性能面で大幅に上回っていた

3000mを超える距離からも命中させる極めて優れた命中精度を実現させたのは高性能な電子機器で構成される射撃管制装置である

その後M1A2を経てM1A3へと改良されたエイブラムスの命中精度には更に磨きがかかっており、ロシア製のT80やT90、T14にすら4000m〜3000mの距離から一方的に撃破できるとさえ言われている

また、アフガン派遣部隊のM1A3エイブラムスは3000m離れた場所の建物の窓

を狙い、見事窓を通過させ建物内へ砲弾を撃ち込むことに成功している

そのような命中精度を誇るエイブラムスがただ走るピックアップ相手に外す筈も無かった

放たれた120mmの砲弾はピックアップの側面中央に命中して吹き飛ばした

「あのエイブラムスやべえな。何発RPG喰らってんだ？」

「知らねえ。10は行ってるだろ」

実はこのM1A3エイブラムス、さつきから何発もRPGの命中弾を受けているのだ既に爆発反応装甲はほぼ無いのだが、それでも走り続ける

その様子を見てレオンは気合を入れた

窓からM4A1を出すと数秒狙いを定め、引き金を引く

するとピックアップの運転手のこめかみに命中、操縦出来なくなったピックアップは横転した

その直後、上空に翼が翻った

「来たぞお！味方だ！」

そうハンビーの運転手が叫ぶと車列を攻撃していたピックアップの1台が吹き飛んだ

襲撃を聞いたA10が来て上空からの援護を開始したのだ

A10の30mmアヴェンジャー機関砲は主力戦車でも数秒で鉄クズに変える
それを無装甲のピックアップに向ければどうなるか

答えは簡単。無くなる、だ

一瞬で跡形も無くなった

A10の援護下ならば戦えると判断した車列は停止し全力で応戦を開始した

ストライカーから飛び出したSEALs達はエイブラムスやストライカーを盾にし
つつテロリスト共に銃弾を浴びせる

徐々にアメリカ軍が押し始める中、ブラックホーク2機とオスプレイ4機、F222
機が飛来した

ブラックホークはグリーンベレーを、オスプレイは海兵隊を吐き出してゆく

F22もテロリストが盾にしていたピックアップにJDAMを投下、テロリストごと
吹き飛ばす

大量の海兵隊員達からの集中砲火を受けたテロリストは数分持たず全滅した
その後は襲撃も無く、無事目的地に着いた

「じゃあ、行つてきます」

「おう。見といてやる」

佐藤達自衛隊は將軍であるリヒャルダと対峙していた

出て来い！そう言われたので初めは佐藤が行こうとしたのだが、久世に「自分が行きます」と言われたので大人しくMk. 11 Mod 0を使い援護する事にしたのだ

「こちら佐藤」

『こちら市ノ瀬』

『こちら海未。どうかしましたか？』

「射撃禁止だ。絶対撃つな。俺が撃つ」

佐藤は返事を待たず通信を切る

すぐに隣に居た穂乃果から理由を聞かれた

「なんで射撃禁止？」

「別に外されたら困るとかそういう理由じゃないぞ。海未も市ノ瀬もまだ若い。十字架はできる限り俺が背負つてやりてえのさ」

「ふーん。何だかんだ言つて優しいんだね」

どこかバツが悪そうに頭をかく佐藤

だが、久世の方から聞こえた大声に反応してスコープを覗き込んだ

「敵将のリヒャルダとか言ったな……………」

リヒャルダは久世に切りかからんとばかりに剣を振り上げている

佐藤はスコープの十字の真ん中にリヒャルダの顔を捉え引き金を引いた

撃ち出された亜音速の弾丸はリヒャルダの頭を貫通……………するのではなく、リ

ヒャルダを昏倒させた

実は佐藤が使っていたMk. 11 Mod 0は麻酔弾が撃てるように改良されてい

る

そのため実際には眠っているのだが敵から見たら飛んできた魔法に倒された様見え

る

「久世、戻って来い。リヒャルダとか言う敵将校は後で回収する。お前は降伏勧告だ」

『了解！』

久世は駆け足で陣地に戻ると拡声器を取り出し大声を上げた

「帝国軍將兵達に継ぐ！この国からの撤退、もしくは武装解除し降伏せよ！降伏する者は両手を見えるよう上に上げてこちらにゆっくり来い！降伏しない者はそちらに残れ！我々は決戦も辞さない！あの竜達のようになりたいか!!」

(まずい！リヒャルダが取り残されている！)

佐藤は直感的に何とかしなくては、そう思った時には声を上げていた

「射撃中止！捕虜を救出する！」

そう言つて駆け出すと腰の愛刀桜吹雪を抜いた

抜くと同時に1振り

ダメージは入っていない、だが隙を作る事は出来た

そうして作り出した隙を見逃す様な佐藤では無い

その隙にリヒャルダの鎧を掴むと引き摺つて戻る

あと少しで辿り着く、そんな時だった

「佐藤1尉危ない！」

久世の声を聞いて振り向くと猛スピードで触手が迫つて来ていた

佐藤は咄嗟にリヒャルダを自衛隊員達に向かつて投げ飛ばす

猛スピードで迫つて来ていた触手は勢いそのまま佐藤に突き刺さった

「ぐっ……この野郎お！痛てえじゃねえか！」

そう叫びながら腰に手を回しM1911A1をホルスターから抜くと刺さったままの触手に向けて引き金を3回引いた

3発の銃弾は触手に穴を開けた

ダメージの蓄積だろうか？触手は消えてなくなっていた

佐藤は自衛隊陣に戻ると急ぎ止血をした

陸で生き残りを掛けた死闘が繰り広げられる中、海上でも異変を察知しようとしていた

最後の希望

対空レーダーの画面には何も映っていない。

ここは大きいCIC。対空戦闘の終了した室内には張り詰めていた緊張感が無くなりつつあった。

きいのCICでは当然の光景で、緊張感は無くとも何が起きようと対応出来るよう訓練されているのがきいの乗組員である。

そんなCICに突如としてアラートが鳴り響いた。

独特の符丁で鳴るアラートは大気圏外からの弾道弾攻撃を知らせる物であるが、それを捉えたレーダー手は困惑していた。

そんな事はお構い無しに詩織が問い質す。

「何？誤作動って理由じゃないでしょ？報告を！」

報告を求められたレーダー手は戸惑いながらも詩織にアラートを鳴らした犯人について報告し始めた。

「大気圏外に微弱な反応があります。大気圏内への突入物体と思われれます。」

「突入物体？ここが特地じゃ無ければ弾道弾の再突入体だって分かるけど、こんな所

「じゃあ弾道弾も無いでしょう。突入体の正体を確認して！」

「了解！」

そう返したレーダー手はレーダー出力を上げ、突入体の方向へ集中させる。

対弾道弾レーダーは対空、対艦とは分けられているので弾道弾の方角へ集中させても監視が無くなる訳ではない。

突入体の正体がレーダーにより判明しレーダー手が確認する。

「ハ、ハ、これは?！」

レーダー手が驚愕する。その情報はすぐさま艦長の詩織に伝えられた。

「艦長! 突入体は隕石です!」

「はあ!?! 隕石!?!」

「はい! 落下、着弾時の威力は核攻撃に匹敵するレベルです! マリースア王国どころか本艦にいぶきも危険です! また、破片も相当数が本艦といぶきに直撃します!」

CICに居た全員の顔が真っ青になった。きいは現代艦では考えられない程の重装甲なので対艦ミサイルや巡航ミサイル等の攻撃には数百発レベルで耐えられる。

しかし、核攻撃と同クラスの威力ならば、耐えられるという確証は無い。それどころか恐らく耐えられないだろう。

また、破片も相当数が直撃するのならば撃沈はまず避けられない。

重装甲のきいでその状況なのだから、装甲が薄いいぶきの被害は甚大な物になるだろう。

すぐに手を打たなければ、詩織は考えを巡らせた。

(どうする？逃げるだけなら地上部隊はヘリで撤退させれば無傷だけど、艦隊はそうは行かない。きいは逃げ切れたとしてもいぶきは間に合わない。見捨てるなんて言ったら隊長が怒鳴り込んでくるわね。なら、方法は一つしか残ってないけど、この方法は賭け。成功しない確率の方が高いけど、やるしかないわね。)

「BMDモード起動！北極の奇跡をもう一度やるわよ！」

「りよ、了解！BMDモード起動！艦長！いぶきもBMDモードを起動する様です！」

「考える事は同じね。二隻も居れば充分よ！」

きいが隕石を迎撃するのは今回で初めてではない。数年前に北極の米露共同研究所へ直撃するコースを取っていた隕石を迎撃し、撃ち落とすのだ。

この事は機密扱いだったが、研究所自体極秘ではない事からアメリカ軍のイージス駆逐艦、巡洋艦による作戦行動だったとして公開され、北極の奇跡と呼ばれる様になった。

それを特地で再現しようと言うのだ。単純計算北極の時よりも成功確率は高いはずだった。あの時はきい単艦だったが、今回は弾道ミサイル迎撃用の装備を整えるいぶきも居る。

「艦長！照準完了！発射用意完了しました！」

その砲術長の声を聞いた詩織は少し目を閉じた。

（きい、貴方なら出来るでしょう？あの時は研究所を護った。今回は一国を、一国の国民を護る。きい、貴方が最後の希望なのよ！）

「SM—3全弾発射!!」

「了解！20発全弾発射あ!!」

艦長からの命令に砲術長は発射スイッチを押し込むことで応じた。ほぼ同時にVL Sのハッチが開きSM—3が飛び出して行く。偶然にもその数秒後にはいぶきからもSM—3が発射された。

「迎撃まで、残り30秒！」

レーダーを覗む乗組員がそう叫ぶ。CICは静まり返りその時を待った。

「迎撃まで3、2、1、マークインターセプト!!」

そう叫ばれた時、空が、光った。

佐藤大和と言う男

「……………」

整然と並べられた墓石達が鎮座している

その中の一つに静かに手を合わせる男、佐藤峯一

「親父、親父の思った世界にはまだなっていない。だけど、ゆっくり休んでくれ。親父はよく働いたんだ」

微笑ましい表情で語り掛けた佐藤

墓石は答える事は無い

墓石には佐藤の親父、佐藤大和さとうやまとの名がすっかり、深く刻み込まれていた

1956年

自衛隊発足から2年

陸幕長室の椅子に座る男

ネクタイは緩め、上着のボタンもほとんど外している

書類に目を落とし退屈そうにする

「どうぞー」

扉をノックした音に反応して入室を促す

失礼します、と入ってきた男はぴっちり制服を着ていた

「日米共同演習につきましてご報告があります。米軍の参加部隊一覧表が届きました」

「ほう、見せてくれ」

椅子に座ったまま書類を受け取ると一通り目を通した

「米軍のグリーンベレーとレンジャーも参加するのか。これは期待されていると思つて良いのかねえ」

「…………… 我が日本の国防は現在、米軍にほとんど頼っています。自衛隊の規模を拡大し、米軍と共に国防を果たせるまでにしなくてはなりません」

「そいつア大層な義務だな。本当ならば自衛隊なんぞ無くても平和な世の中になるのが一番なのだがねエ。それにあちら[＊]さんは中東にハンガリー、印パと忙しいだろうに。まあ良い、この後は何だっけ？」

「この後は西部方面隊の創設式です」

「西方隊か、去年創設の筈だったが上から北方の守りを強化しろつて言われちまつて北方に部隊を新設したから予算足りなくなつて1年延期したんだつたな」

「ええ、北方にはソ連軍が居ますからね。それに比べると西方の敵といえは中国ぐらいな物ですから、後回しと判断されたのでしよう」

「とりあえず創設式に行こうじゃないか」

「ハッ！その前に制服を直した方がよろしいかと！」

2人は部屋を出ていった

西部方面隊創設式は特に問題も無く、スムーズに進んでいった

そして、陸幕長挨拶になった

前に出ると、さつきと同一人物とは思えない程しつかりした声で始めた

「西部方面隊の諸君、我々は今ソビエト連邦と言う強大な脅威に晒されている。だが、この度設立された西部方面隊は九州を中心としている。何故か？それは今後日本に対して脅威になる可能性のある中国から日本を守る為だ。今の為の部隊ではない、未来の為の部隊だ。私は、自衛隊はおろか世界中の軍が無くなる平和な世界になる事を祈っている。残念ながら私が生きている内はそれが達成される事は無いだろう。その世界への

第1歩は他国への攻撃を非とする自衛隊の存在なのだ。自衛隊が国民に声援で迎えられちやほやされるのは他国から侵略を受け日本が存続の危機に陥っている時か、災害派遣の時のみだ。自衛隊は国民に歓迎されない方が良い。どうか耐えてほしい。私は、この度創設された西部方面隊を後方部隊、予備部隊等とは決して考えていない。ここは必ず将来前線へと変化する。その時、慌てて対応しても遅いのだ。今から備える。その備えとは諸君達西部方面隊なのだ。諸君達は間違い無く陸上自衛隊の主力部隊の一翼を担っているのだ。最後に西部方面隊の創設を心より祝福する！」

一礼した男を会場に居た全員が拍手で称えた

普段から真面目なのか、そう聞かれればそうではない

だが、平和な世界への熱い想いを心の中に潜んでいる

自らの給料の9割近くを孤児院等に寄付し自らは質素な生活を送る

休日には畑で野菜を育て、仕事のある日には各駐屯地を訪れ隊員達を直接激励する

決して裕福ではなかったが、妻と2人3脚で歩む生活は幸せで溢れていたようだ

その仕事への熱意と自分を後回しにしても貧しい子供達を救う姿、平和な世界への

熱い想いから後に最高の陸幕長と呼ばれる様になる

その男の名は

陸上自衛隊 初代陸上幕僚長 佐藤大和陸将

陸上自衛隊特殊部隊嵐隊長、佐藤峯一の父親となる男である

諦めぬ者達

「隕石はどうなった!？」

「そ、それがミサイルの直撃により粉碎されましたが相当数が本艦及びいぶき、付近の海そしてマリースア王国に着弾します!」

「ダメだったのか………クソツ!!」

珍しく詩織が毒づいた

迎撃ミサイルの攻撃も巨大な隕石の前には無力であった

だが、詩織は諦める事を良しとしなかった

「対空戦闘用意! ESSM、RAM、CIWS射撃用意! 主砲対空射撃用意! 対空砲弾装填!」

「はっ!？」

「聞こえなかった? 対空戦闘用意よ! 隕石を撃ち落とす! 異論は認めん! 考えうる限り全ての手段で隕石相手に対空戦闘をする! さっさと用意しなさい!」

「りよ、了解! ESSM発射用意! トラックナンバー1から84まで振り分け完了! 発射用意完了!」

「主砲対空砲弾装填！発射用意完了！」

「RAM、CIWS起動！全自動射撃モードに移行、射程内の敵弾に対して射撃開始！」
「全乗組員に告ぐ！本艦はこれより対空戦闘に移行する！各員持ち場に着け！」

「全隔壁閉鎖！外部装甲ハッチ閉じます！」

対潜魚雷発射管が見えていたハッチは閉じ、CIWSとRAMが次々と空に銃身を向ける

また、艦の各所に配置されたM2重機関銃も発射用意を整え空を睨んでいた

詩織は短いが全てに対した命令を下した

「各員ウエボン武器器オールフリー使用自由！隕石共を撃ち落とせえ！」

「ESSM全弾発射！」

「主砲撃ち方はじーめー！」

VLSから白い煙と共にミサイルが飛び出し、主砲の61cm砲の砲身3本からそれぞれ1発ずつ砲弾が飛んでゆく

「主砲砲身が壊れてもいいから制限解除！全力射撃！」

きいの主砲には普段制限が掛けられていて次弾発射まで8秒となっているが、制限を解除する事で半分の4秒まで早める事が出来る

もちろん代償があり、砲身の寿命が著しく縮まるのだ

だが、その圧倒的スピードから繰り出される対空射撃は凄まじい物になる
「隊長、ちよつとヤバいかも。何とかしてね！」

詩織は慌ただしいC I Cの中でそう呟いた

「おい久世、何諦めてんだ！」

「でも佐藤さん、もう僕達に出来る事なんて………」

「佐藤殿、久世殿の言う通りだ。あなた達は乗ってきた空飛ぶ物に乗れば無事であろう」
「俺達地上部隊はな！いぶきもきいも大破じゃ済まないぞ！それにあいつらは諦めてない！そんな勇氣ある奴らを見捨てて俺達が諦める？ふざけるな！！俺達も出来る事をやるぞー！」

「…………… そうですね！やりましょう！」

「異国の者が諦めていないのに、私が諦める訳にはいかん！」

久世もカルダも持ち直した

そこに加藤がやって来た

「決まったみたいだね。作戦を立てようか。カルダさん、あれなんだと思う？」

「うむ、確証は無いのだが… 流星落としてはないのかと思う」

「流星落とし？」

カルダの話によると流星落としては制御者の命を引き換えに発動するらしい

制御装置によって制御されるが、制御装置は同じ物が2回使われた形跡は無い

「アイツが制御装置を持っていると？」

「恐らくは」

「なるほど、ならその制御装置とやらをぶつ壊せば隕石は空気抵抗やらなんやらで拡散し、市民の密集するエリアは避けられるかも知れないと言う事だな」

カルダの情報から佐藤はどうすれば隕石を何とか出来るのかを考えた

そんな中、加藤は焦った顔で言った

「さて、こんな状況だ。単刀直入に言おう。いぶきにはタクティカルトマホークが搭載されている」

「え、トマホークと言うとあの巡航ミサイルですよ？あれは憲法違反になるかもしれないから自衛隊では配備しない事になってるんじゃないですか？」

「時代は変わった。北のミサイルが国民を餓死させてでも配備された。どんだけ迎撃してもやがて限界が来る。だから……」

「ミサイルをトマホークでピンポイント爆撃し破壊するのは専守防衛の範囲内、と言う事ですか」

「久世くん正解！峯一も解説お疲れ様ー」

トマホークと言う強大な武器の存在を思い出したが、問題もあつた

「だが加藤。あれをどうやって誘導する？GPSは使えんぞ？まさかとは思うがヘリ飛ばして誘導させるのか？」

「いや、トマホークの内数発は改良型だね。終末誘導に赤外線方式を採用しているんだ」
「なるほど、奴を燃やせばいい訳だな。問題はどうかやって燃やすかだな」

2人が作戦について話し合う中、カルダが声を上げた

「作戦があるのだが？」

「カルダさん、どうぞ！」

「まず、我々が全力で攻撃して奴の気を逸らす。そして、あの龍を倒した…えー、」

「84mm無反動砲ですか？」

「そう、それだ。それを奴に放って、私がリヒャルダの使っていた剣で敵を燃やす」

「そして、その火を頼りにトマホークが突っ込むって事か。なかなか良い作戦だな」

佐藤のお墨付きもあり、この作戦を実行する事が決まった

佐藤は穂乃果達の所に行き命令を出した

「よし、作戦はさっきの通りだ。花陽はAT4CSを撃て。穂乃果、絵里、ことり、凜は俺と前線で援護する。残りはヘリに先に乗って待機、俺達が乗ったらすぐ離陸して上空から攻撃する。良いな！」

「了解!!」

最後まで諦めない者達の決戦が、始まろうとしていた

諦めぬ者達の奇跡

「撃て撃て！巫女さん達が行くぞ！」

作戦通り自衛隊による攻撃が開始された

協力を申し出たリユミ達数十人の神官戦士が前に出ると呪文の詠唱を始め、少しずつ手から光が溢れ出てくる

「あの人は、必ず守るという約束を果たしました。今度は私達が約束を果たす番です！」

そう叫びながら苦悶の表情を見せながらも前進するリユミ

突然反発が無くなった。障壁魔法が破られたのだ

しかし、彼女達は神官見習い。魔物を消し去る事は出来ない

伸びてきた黒い触手がリユミ達に迫るが、それを防いだ者が居た

「佐藤様！」

「気にすんなー！嵐各員射撃！迫ってくる触手を撃ち落としてやれ！」

佐藤がリユミ達より前に出て桜吹雪で触手を切り落としていた

また、嵐の隊員達も正確な射撃で触手の頭を押える事で佐藤がやりやすい状況を作り

出していた

そんな連携を見て他の自衛隊員は驚愕していた

「すげえ。あんなのありか!」

「うるせえ!俺達もやるぞ!俺達にこの状況であんな精密射撃は出来んが数で押すんだ!今出来る事をやって佐藤一尉達が少しでもやりやすい状況を作るんだ!俺達は出来る事をやるんだ!」

「そうだな……やるか!」

他の自衛隊員もとにかく撃ちまくって弾幕を作り触手が近づけないようにしていた

そんな中、佐藤が叫んだ

「久世え!!」

そして、それに続くように草むらの中から叫び声が上がった

「後方の安全確認完了!発射あ!!」

佐藤達に気を取られていた魔物ーゲンフルにバックブラストを残して飛び去った8
4mm砲弾が突っ込み、爆発を起こした

それを目の前で見た佐藤は後ろに振り向き主力部隊に命令を飛ばした

「よし!全員射撃中止!撤退だ!へりに乗れ!トマホークが飛んできて吹き飛ばすぞ
!」

その声に全員が弾かれたように走り出し戻つて来たブラックホークに乗り込む
佐藤はリヒャルダの手に手錠を掛けて抱えるとクロウホークに放り込み自分も飛び
乗った

すぐ無線機を掴み久世に通信を入れた

「久世！早く逃げろ！トマホークが来るぞ！」

『無理です！』

予想外の答えに佐藤はびつくりしたが理由を聞いた

「何でだあ!？」

『カルダさんが取り残されてます!!』

それを聞いて無線機を機内に放り投げると魔物の方を見た

確かにカルダが捕らわれている

そして、魔物に向かっていく久世の姿も見えた

それを見ていた穂乃果や凜は咄嗟に飛び出そうとしたが佐藤が制止した

「どこ行くつもりだ！」

「でも峯一！2人を助けないと！」

「そうだよ！トマホークが着弾したら2人共死んじゃうよ！」

「だが、俺達が行つても何も出来ん！それにお前等が捕まったらどうする？上空から射

撃で援護するんだ！カルダは久世に任せる！良いな！」

「……了解」

2人を止めた佐藤はコクピットに座る真姫も含めた各機のパイロットに無線で指示を飛ばす

「よし離陸だ！全機離陸したら久世を援護する！八重樫！お前の機が久世達を拾え！着陸の隙は無いから横からかつさらえ！」

上空で高度を維持したブラックホーク、クロウホークが旋回しながら射撃を加える

この中で一番重武装であるクロウホークはM2重機やミニガンによる射撃をしていたが、効果があるのかどうか分からなかった

ただ、確かに分かる事が1つあった

久世とカルダが脱出した事だ

その光景は全員が見ていた

「やりやがったな久世え！」

笑いながらそう叫んだ佐藤

すかさず1機のブラックホークが久世とカルダを拾い急上昇する

途中1回触手に捕まったが狙撃が断ち切った

そして、燃える魔物に聖剣トモホウケンが突き刺さり爆発した

そのすぐ後、きいからハリネズミの様に出ていた光の線が消えた
対空砲火が止んだのだ

恐らくレーダーで捉えていた隕石の動きからほとんどが外れる事が分かったんだろ
う、そう佐藤は当たりをつけた

「ふう、終わったか」

「……ここは天国か？地獄か？」

そう尋ねる声に振り向くと手錠を掛けられたリヒャルダが目を覚ましていた

「天国の外側かもな。そんな事は自分で見つけてくれ」

「何故助けた？」

「深い理由は無え。でもまあ、何で助けたかって言われれば戦場だからだろうな」

「どういう事だ？」

「戦場なんて所は手から零れるように命が消えてく。俺は目の前で零れそうになつて
命は助けてやりたかった…… つまらん自己満足さ」

「そうか。つまらん事は無いさ。その自己満足で私は今ここに生きているんだ。感謝す
る」

最後に微笑んで目を閉じたりヒャルダ

それを見た佐藤はバツが悪そうに外に顔を向けるのだった

戦後処理と探し人

「あーあ、今回結構弾使ったなあ。補給要請しとくか」

きいの特別士官室で片耳にイヤホンを着け書類を見ながら呟くのは佐藤

戦闘が終結したので使用弾薬や燃料等をまとめて補給要請をする所だった

補給要請には艦艇用、航空機用の2種類の燃料に対空ミサイルや主砲砲弾等いぶきが使用した物もあった

どうして佐藤がこんな事をやっているかというと、戦闘後宴が開かれる事になり佐藤も出ないか？と加藤に言われたのだが、佐藤は補給要請をしたり報告書をまとめたりと忙しいのでムリと断ったのでその分仕事はしなくてはと佐藤が思い艦隊の分までやる事にしたのだ

ちなみに他の陸自隊員は炊き出しをやっている

他の嵐の隊員はとりあえずの所きい艦内で待機している

補給リストを作成した佐藤は少し休もうかと思つたが、パソコンのライブチャットに着信があったのでそれに応えることにした

相手はアルヌスに居る狭間陸将だった

「狭間陸将でしたか。どうされましたか？」

『いや、いきなり戦闘だったと聞いてな。こちらに人員の被害は？』

「自衛隊員はヘリパイロット2人が負傷しましたが、命に関わるほどでもないかと。その他は報告書を作成しましたので後程送ります。あと結構弾薬を使いましたので補給をお願いします」

『ああ……補給なんだが、暫く出来そうにないんだ』

補給が出来ないという事は佐藤も想定していなかった

補給艦が1隻艦隊に居るので当分は大丈夫かも知れないが、先を見据えて補給は出来ればしたい

それに、暫くという事は戦闘は控えなければならぬという事だ

ただ、佐藤は何故補給が出来ないのか気になった

「何故補給は出来ないのです？」

『そちらに向かう航路の途中に鎧を着た鯨みたいな生物が出現してな。交戦した海自潜水艦が大破した為、その海域には入れないんだ』

「なるほど。護衛艦隊と共に突破するのは？」

『船の数が足りない。空路も考えたがヘリじゃあ航続距離が足りないし固定翼機だと滑走路も無いし空中投下も難しいだろう。今日からオスプレイが配備されるから行ける

可能性もあるが基本アレは海兵隊機だからな。輸送の為だけに飛ばすと良い顔をしないだろう。そもそもヘリだと運べる燃料に限界があるしな』

「了解です。嵐用の弾薬はまだ余裕ですし何とかしましょう。ところで、他に何かありますか?」

『うむ、もう一つ。こちらの方が大事だな』

画面の中の狭間陸将がコップを手に取りコーヒーを一口飲むとこちらを向いて話を再開した

『日本人2人の目撃証言がある。米軍の第160特殊作戦航空連隊第3大隊中強襲ヘリコプター中隊のBブラボー小隊が派遣されたが、上空からの偵察でも見かけたらしい』

「それを我々に搜索しろ……と?」

『察しが良くて助かる。既にB小隊のオスプレイがそちらに向かっている。部隊編成は君に任せる。目撃された日本人2人の情報はB小隊が持っているからそれを見せてもらってくれ』

「了解です。では」

パソコンのライブチャットを切ると佐藤は動き始めた

まずは艦橋に連絡する為卓上の受話器を取り艦橋の番号を押す

すぐに艦橋に居た詩織に繋がった

「詩織か？」

『ええ。どうかした？』

「これからナイトストーリーカーズB小隊のオスプレイが来る。やしまに連絡して受け入れさせてくれ。あ、あとシーホークを出せる様にしといてくれ。シーホークでやしまに行く」

『了解』

それだけ伝えて受話器を置くと部屋から出て久世の所へ向かった

きいからはタラップでマリースア王国に降りられる

降りて少しした所で炊き出しをやっている久世と市ノ瀬を見つけて声を掛けた

「久世、市ノ瀬来い。俺等3人で出動だ。装備を整えてしもきた艦上に集合だ。きいのヘリが拾う」

「マジっすか？こんな時に演習でもやるんですか？」

「んな訳無いだろ。実戦だ」

「今すぐですよね？」

「そうだ。準備開始！」

「了解！」

2人は敬礼すると駆け足で艦へ帰っていった

佐藤もきいに戻ると装備を整える

ヘルメットや防弾ベスト、マガジンポーチを装備してふと考えた

「さて、武器はどうするか……」

今回は搜索、救出が目的だが戦闘が無いとも限らない

「M4とガバメント、あとテイザーだな」

そう呟いてガバメントを腰のホルスターに入れ左脇のホルスターにはテイザー銃を入れた

テイザー銃用のカードリッジは20個携帯している

佐藤はM4A1を持って部屋を出た

艦尾にあるヘリパッドではシーホークがローターを回していて、キャビンに乗り込むとパイロット席に真姫とことりの姿があった

「準備完了。いつでも行けるよ」

「分かった、しもきたに着艦して久世達を拾う」

「了解、離陸するわよ」

シーホークは離陸するとしもきたに向かう

しもきたはそんなに離れていないのですぐに着いた

連絡が入っていたのか誘導員が誘導してくれて着艦するとすぐに久世と市ノ瀬が

入ってきた

離陸すると丁度オスプレイの姿が見えた

やしまに着艦するのは同時になってしまったが、広い甲板だ。2機程度なら問題無く着艦出来た

着艦するとシーホークはエンジンが切られパイロット2人も降りてきた

「え、お前等来んの??初耳なんですけど」

「言つてないわよ。でも、良いでしょ?」

「行きたいしね。穂乃果ちゃん呼んじやうよ?」

「まあ、別に良いか」

2人が同行する事を認めた後ろではやしまの乗組員がテキパキとシーホークを移動させていた

オスプレイも後部ハッチが開いて女性が1人降りてくる

上は緑1色のタンクトップを、下は迷彩のズボンを履いている
その顔に佐藤は見覚えがあつた

「ありや、クイントか?」

「お知り合いですか?」

「まあ、な」

女性は佐藤と久世の前で立ち止まり敬礼した

女性の肩には薔薇の刺青が入っていた

「米第160特殊作戦航空連隊第3大隊強襲ヘリコプター中隊B小隊長、クイント中尉です」

「陸上自衛隊、久世啓幸3尉です」

「佐藤だ。久しぶりだな、クイント」

「はい、アフガンぶりですか？」

「じゃねえか？」

「とりあえず機内へ。外は暑いですし」

そうクイントに言われてオスプレイ機内へ入る

機内には19人の隊員が座っていたが、そのほとんどを佐藤は知っている

空いている席に座るとクイントから資料を受け取り説明を受ける

「現場上空から一帯を捜しましたが見つかったのはその1回だけ。写真が撮れたのは幸いです」

「だな。それにしても、どっかで見た事があるな、この服」

「男女1人ずつ、合わせて2人かと」

受け取った資料には画像があり、鮮明ではないが男と女、男の方は黒い服を着ていて

女の方は白い服を着ている事が分かる

「流石にこれだけじゃ分からんな」

「珍しいですね。私の時は服だけで分かったのに」

「どういう事ですか？佐藤一尉」

「あー、こいつを拾ったのは俺なんだわ。クイントは元空軍のパイロットでな。撃墜されて大ケガ負って逃げた方向がパイロットスーツで分かったんだよ。その後はパイロットを辞めてナイトストーカーズになったんだと」

真姫達も知らなかった事であった

クイントと佐藤は久しぶりの再会に話をしながら目撃された地点に向かっていった

幻想郷

「クイント、ここいらで俺等は降りる。地上から探るからお前らは上から見てください。燃料がヤバかったら帰投しろ。その時は久世達を降ろしてやってくれ」

「了解です。着陸は出来なさそうなのでロープで降下してください。パイロット、降りれる高度まで降下して」

『了解』

佐藤、ことり、真姫がロープで地上に降りる

3人を降ろしたオスプレイはロープを回収して飛び去った

3人は周りを見渡しながらどうするか相談する

「さて、どうするか。全く手掛かりが無いからな。」

「とりあえず道に沿って歩いてみましょう。地図も無いからどこに行くか分からないけど」

「迷子にならない？」

「大丈夫よ。3人とも発信機持つてるし」

「で、歩いて会った人に情報を求める、か。それしか無いな。オスプレイには一応地図も

あるし迷ったら発信機の情報を頼りに案内してもらおう。よし行こう。」

3人は事前の情報で街の存在を知っていたのでその方角に向けて移動する

道中、10人程に話を聞いたが、分からないとの事だった

そうこうして歩いている内に街の入り口に着いた

「マジ情報がねえな。街の名前は…… 幻想郷?」

「オスプレイからの情報によるとこの地方の事を幻想郷って言うらしいわ。だから街の名前もそうなんじゃない?」

「これだけ大きいから情報も集ま「何をしてるのかしら?」…… めんどいのが来た」

佐藤が声に反応して振り向くと刀を抜いて臨戦態勢を取っている銀髪の女性が1人、立っていた

「めんどいのは失礼ね」

「ああ…… それはすまん。俺達人を探しててな。歩いてたらこの街が見えたんだ。街の中なら情報があると思って入ろうとしてたんだ」

「見るからに怪しいのにはいそうですか?」

「ならねえな。じゃあどうする?」

「とりあえず…… 斬る!」

その一言と共に斬りかかって来たのに何とか反応した佐藤は腰の桜吹雪を抜き受け

止めた

「おうおういきなりこれかよ!? 2人下がってる! 俺が何とかする!」

「何とか出来るものならやってみなさい!」

佐藤は何とか押し返すとM4A1を投げ捨て剣に集中する

佐藤でもギリギリ反応出来る太刀筋は素早く正確に急所を捉えようとしていた

2人が鏢迫り合いになっている光景を真姫とことりはただ見ていた

「なかなかやるわね。貴方」

「そりやどうも」

「いい加減大人しく斬られたら?」

「はっ! やだね」

2人共同時に後ろに飛び退くと、不意にパンパンと音が鳴った

「そこまでよ妖夢。これ以上やっても貴女に勝ち目は無いわ」

「咲夜、見てたの? 止めないで」

「ダメ。気付かない? この人貴女を斬るつもり無いわ」

「ありや、バレたか」

「そんな事で妖夢とやり合うなんて相当な腕よ、貴方。名前は?」

「佐藤峯一だ」

「佐藤？そう、貴方が……」

「知ってるのか？」

「貴方のお父様からね」

これには佐藤も驚いた

戦いを止めた女性、咲夜は佐藤の父大和を知っているとこの事だ

結局斬りかかって来た女性、妖夢を宥めてもらい話を聞く為に街の中にある紅魔館と
いう所に向かった

咲夜はそこでメイド長をやっているらしい

大和についてはその主に聞けとの事だった

咲夜に紅魔館へと連れて行ってもらい、中へと入った

アメリカ 核兵器廃棄施設

ここではアメリカが冷戦時に開発した各種核兵器を廃棄する為の作業が行われている

その施設の前には複数の軍用トラック、ハンビーが止められ大慌てで兵士が駆け回っていた

「なんてこった……… 生存者は？」

「ゼロです。警備隊も全滅です」

「アレは！あるのか！」

この施設は核処理施設と言う特性上、1日に数回国防総省の関連部門に定時報告をする事になっている

だが、30分前にしなければならぬ定時報告が無かったのだ

第1特殊部隊デルタ作戦分遣隊が急行した所銃撃戦の痕跡を発見し警備隊の全滅も確

認した

そして付近の海兵隊基地から海兵隊員が基地の警備、また国防総省から送られた本件の担当者と現場確認をしていた

「ありません！やられました！」

「すぐホワイトハウスとペンタゴンに情報を送れ！大統領にも伝えるんだ！」

「了解しました！」

彼等が焦っているのには理由がある

「まずいぞ……核を奪われたなんて!!」

ここで廃棄作業を行おうとしていたデイビークロケット20発とSADM5発がそのまま消え去っていたからであった

最悪の顔色と協力者

アメリカ ホワイトハウス

「国防長官、報告を」

そう国防長官に話すデイレル大統領

当の国防長官の顔色は最悪だった

「はっ！核処理施設が襲撃を受け、廃棄作業予定だったデイベークロケット20発とSADM5発が奪取されました！」

「あつてはならない事だぞ………これは。対応は！」

「アメリカ軍全軍に待機命令を出しています！基本的に5時間以内に世界中何処にでも展開出来ます！またCIA、FBI共に捜査を開始しました！アメリカ各地に軍による検問を設置し航空機船舶共に国外へ出る物はアメリカ特殊作戦軍各隊による立ち入り調査を厳重に行っており！沿岸に關しても沿岸警備隊、海軍が共同で警備を行っており動かせる艦艇を総動員しています！また、各州の警察に検問を行わせています！」

「非常事態宣言を発令しろ。偵察機を動員して空からも探せ。メキシコとの国境に陸軍を配備してメキシコへ逃げるのを防ぐんだ。あと他の核関連施設の警備を増員しろ！」

戦力と人員を惜しむな！」

「分かりました！」

「副大統領、本来君にさせる仕事では無いが急ぎ日本の佐藤峯一に連絡を取ってくれ。私が直接話す。日本のモトイにも連絡を頼む」

「了解しました」

大統領は深く溜息を吐くのだった

核が盗まれた事等知らない佐藤達一行は館の主と対面するところだった

「お嬢様、お客様をお連れ致しました。佐藤峯一様です」

「どうぞ〜」

咲夜に案内された部屋に入ると子供にしか見えないのが1人居た

ちなみに、ことりと真姫は別室待機している

「失礼します。日本国「陸上自衛隊の佐藤峯一、でしょ?」………はい」

「お嬢様、私は失礼致します。家事がごさいますので」

「ええ、ありがとう咲夜。峯一も座って?敬語はいいのよ?」

「分かりました」

目の前にあった椅子に座る

テーブルを挟んで1対1になる

既にテーブルには紅茶がセットしてあるが、流石にすぐ口をつけるような事はしない

毒が仕込まれている可能性もあるからだが、その事を見て取ったのか先手を打たれた

「私はレミリア・スカーレット。安心して?紅茶に毒なんて入ってないわ。私の口を付

けた物で良ければこっちを飲む?」

「気にしないでくれ、香りで毒が入ってないのは分かってる」

「じゃあ飲みなさい？人の好意を無駄にするのはもったいないわ」
「…… そうだな、頂こう」

そこまで言われると飲まない訳にもいかなないので口を付ける
「美味しいな」

「ありがとう。私の好きな紅茶なの」

「それで、佐藤大和を知ってるってのは何故？」

「ああ、それはね、あの人間違つてここに来ちやったのよ。そつちの世界とこつちの世界を繋いだ時にこつちに来ちやってね、向こうに戻るまでここで執事として働いてたの」

「そうなのか。親父め、3年近く行方不明だった時ここに居たのかよ。武器は持ってたか？」

「ええ、何だったかしら……… 確かステアーAUGとか言つてたわ」

「ステアーAUG？親父はそんなの使つてたのか」

こゝこで佐藤は大切な事を思い出した

親父の話も聞きたいが、そちらの方が大切だ

「ああ、そうだ。もう1つ聞きたい事があるんだ。この2人を知ってるか？」

佐藤はナイトストーカーズが撮つた2人組の写る写真をレミリアに見せた

「見た事は無いわね。ごめんなさい、力になれなくて」

「いや、良いんだ。まだ時間はある」

「それでも、よ。協力するわ。咲夜」

「如何なさいましたかお嬢様」

「霊夢を呼んで。今すぐね」

「分かりました」

「峯一、貴方に良い事が起きるおまじないをしてあげるわ。腕を出して?」

「ん? とうか? …… つ!」

言われた通り袖をまくって腕を出した佐藤

すると突然レミリアが腕に噛み付いたのだ

流石に佐藤も驚いていた

「おい! 何やってんだ!」

「ん?」

「お前…………… 吸血鬼か? 俺の血を?」

「ええ♪血を貰うだけじゃないわよ? 私に噛まれるのは私と契約する事を意味するの。だからこれまで以上に活躍出来るわ」

突然契約したと言われても困る佐藤だが、話を聞く限り特にデメリットは無さそうなので何も言わない佐藤

と、突然ドアが凄い勢いで開いて一人の少女が飛び込んできた
「レミリア〜何？」

「来たわね霊夢。空からこの2人を探して。良いわね？」
「分かった〜」

そう言うのと飛び込んできた少女、霊夢は写真を見るとまた飛び出して行った
その様子に佐藤はフリーズしたままだった

「さ、空からの目は確保したわ。彼女の案内で行くと良いわよ」

「あ、ああ」

「今度来たら優雅にお茶会でもしましょう？」

「そうだな、世話になった」

そう言い残して佐藤は部屋から出て行った

新たな家族

『上から見た感じ、居なさそうよ？』

「分かった。なんかあったら教えてくれ」

霊夢に通信機を渡して上からの状況を報告してもらいながら道を歩いて情報を集める佐藤達

現在ナイトストーカーズのオスプレイは燃料補給で帰還しているので上空支援は霊夢だけだ

ちなみに霊夢は空を飛べる程度の能力という物を持っているらしく、他にも様々な能力を持つ人物は多いと言う

それはそうと、特地でない佐藤達の元居た世界ではアメリカの核が奪われているのが佐藤はまだ何も知らない

しかし幸運な事に不活性化処理を施してあったらしく、どんな方法で核を使うにしても1年はかかる新技術を用いているので今後1年間は使われないだろうという予測だ

その使用を指示したデイレルいわく

『テストの為に使ったんだがそれが幸運をもたらしたネ』

との事

佐藤達は全く情報が入らない中、突然地面が揺れた

「何だ!?!地震か?」

「と、特地での地震は観測されてないわよ?」

『ちよつと隠れた方がいいわ!ギカントが来る!』

「ギカント?」

霊夢が慌てて降りて来たが既にギカントとやらは見えていた

人間をそのまま巨大化したような生物のこれがギカントと言うらしい

目の前で止まったので話してみる

「すみません、とある2人組を探しているのですが」

「…………… すまないが、自分より弱い者に話す口は無い」

「そうか。舐められたもんだな」

そのやり取りの後、ギカントは背筋に悪寒が走った

(この男、一体何者だ?)

自分は強い

実際ギカントとはここら辺の生物の中で一番強い種類の生物だ

その自分が恐怖を覚える程強い男

その実力を試したくなかったギカントは全力で拳を振り下ろした

「ちよつと!!」

「あー、大丈夫よ」

「大丈夫だね」

霊夢が顔を真っ青にする中真姫とことりはのほほんとしていてかなりの温度差があるのだが、2人にはどうなるか分かっていたらしい

「これで満足か? 何ならこっちから仕掛けるが」

片手で拳を止める佐藤

地面は蜘蛛の巣状にヒビが入っているが佐藤は全く無傷のようだ

流石にこれにはギカントも完敗を知らされた

「いえ、失礼しました。私の負けです」

「分かってくれば構わない。それで、この2人を見たか?」

「見てはいませんが、この先の右手の小さな道を進んだ所の洞窟で人が出入りした形跡がありました。付近の鳥達も少し騒がしくなっている様です」

「なるほど……ありがとう」

最も有力な情報を手に入れた佐藤は真っ青で固まっている霊夢を見つけて声を掛けた

「霊夢？どうしたんだ？」

「全く、あなたが潰されたと思ったのよ」

「私達は大丈夫って分かってたけどね」

「あー、なるほど。取り敢えずとっとと再起動させて行くぞ」

霊夢を再起動させた佐藤達は言われた通りに道を辿って洞窟に着いた

「中に居るな。真姫、洞窟スキャンを」

「分かったわ」

真姫はバックから箱型の装置を取り出しそれを洞窟の穴に向ける

この装置は嵐製で洞窟の入り口から内部構造を把握出来る様になっているのだ

「反応あり。2人組を確認。それと生存確認もしたわ」

「出口はここだけ？」

「ええ」

「じゃあ準備してから呼び掛けるか」

佐藤は円形の装置を取り出して地面に設置、洞窟脇の壁に張り付いて大声を出した

「我々は日本国陸上自衛隊です！救助に来ました！両手を見える所に上げて、ゆっくり

出てきて下さい！」

そう叫んだ数秒後、黒い塊が飛び出してきた

(なんつー速さだ！)

佐藤ですら反応出来ない速さの塊……塊というか人なのだが速すぎて塊にしかなえなかったのだ

当然そんなものに対応は出来ないが、先程の機械は対応出来た

これはテイザー銃の機能をショットガンの様な射程の比較的長い物で使えるようにという要望から出来た12ケージのテイザー弾を察知した標的に撃ち出す機械である。元々はドイツのとある特殊部隊員の男が開発した小型のアクティブ・デیفフェンス・システムだったのを嵐が開発者と共同で改造したのだ

かなりの電流が筋肉を麻痺させ動けなくする為、意志に関係なく行動を止められる。倒れた黒服の男に駆け寄って手元の剣を蹴り飛ばす佐藤

「おいおい、手間掛けさせんなキリト！」

「!? 何で俺の事……」

「うるせえ！ ゆっくり話してやるから！ アスナ！ 居るんだろ！ 出てこい！」

そう洞窟内に向かって叫ぶと白服の女が出てきた

佐藤は黒服の男を立てさせて話を聞いた

「知ってるが改めて自己紹介してくれ。ゲーム名じゃなくて本名な」

「桐々谷きりがや かずと和人だよ。キリトって呼んでくれ」

「結城 明日奈よ。アスナって呼んで」

「なんでSAO事件の2人がここにいんだよ……」

頭を掻きながら愚痴のように呟く佐藤

SAO事件とは、VRゲーム『ソードアート・オンライン』で起こった事件である

このゲームをサービス開始と共にプレイしたプレイヤー達がゲーム内に閉じこめられ、ゲーム内で死ねばプレイヤーの本人も死ぬと言うデスゲームになった

そんな大事件に特殊部隊である佐藤達嵐が出動しない訳も無くソードアート・オンライン、そしてそれに使われるナーヴギアの開発者である茅場晶彦の搜索、プレイヤー達の救出を目的に行動していた

結果的に茅場晶彦を見つける事は出来なかったが、キリトとアスナの活躍によりソードアート・オンラインがクリアされプレイヤー達はデスゲームから解放された

そんな英雄2人がここに居る理由を聞いてみた

「で、なんでここに居るんだ？」

「えつと俺達2人で秋葉原に出掛けたんですけど、裏路地に居た猫に何故か惹かれてしまった」

「猫に近付いたんです。それで気が付いたらこの格好でここに居たんです」

「んー、マジさっぱり分からん。真姫、ことり何か思い当たる節あるか？」

「無いわね。シユレディングアの猫だかつて理論はあったけどそれとも合わないと思うわ」

「私も。それこそ想像出来ない超常現象が起こったんじゃないかな?」

「まあいいや。霊夢、俺達は帰還するから帰ってくれていいぞ。ありがとうな」

「良いのよ。じゃあね」

霊夢が空を飛んで何処かへ去って行くと要請した所にオスプレイが飛んで来た

全員を機内に収容するとマリースアへと向けて飛ぶ

機内ではキリトと佐藤が話していた

「佐藤さん、ちよつと良いですか?」

「なんだ?」

「佐藤さん達の部隊ってSAO事件の時、出動したんですか?」

そう聞かれた佐藤は自分達がどんな事でも出動したのか、結果どうだったのか全て話した

「これが全てだ。結果俺達は何も出来なかったのは申し訳無く思ってる。茅場晶彦の居場所を突き止める後一步にまで迫ったのにな」

「茅場の居場所を突き止める寸前まで迫ったんですか!?!」

「ああ……俺も知ってるプログラマーが知ってたんだよ。そいつの所に行って聞き出

そうとしたが反撃され聞き出せずに頭をブチ抜くハメになったがな」

「そうなんですか……」

「なあキリト、1つ相談があるんだ」

1つ区切って佐藤は真面目な顔で言った

「俺達の部隊に入らないか？」

「えっ」

「お前の経歴は全部知ってる。だが俺達なら経歴は問わない。それにお前にはその才能がある」

「才能って、人殺し……のですか？」

「はっはっはっ、そりゃあ俺の持つてる才能だ。お前は人を助ける才能だよ」

「人を……助ける？」

「そうだ。お前は必ず誰かを助ける。それが大勢なのか、特定の個人なのかは分からん。SAOの時お前は大勢の人を助けた。その力を貸して欲しい」

真面目な、真剣な佐藤からのスカウト

キリトは若干考えたが佐藤の目を真っ直ぐ見つめて答えた

「入れてください」

「後戻りは出来んぞ」

「分かってます！俺が誰かの力になれるならやります！」

佐藤は軽く笑ってから別の方を見た

「あっちも決断しちまったみたいだな」

「え？」

その方向にはクイントとアスナが立っていた

アスナも同じく決断した真っ直ぐな瞳で佐藤に話を切り出した

「私も嵐に入れてください！」

「アスナッ!？」

「クイント、てめえ……」

「分かってますよ。でもこの子の強い意志は必ず貴方と大勢の人の力になります。それ
にこの子は貴方と違ってとても強い」

「……………分かった!!」

佐藤は椅子から立ち上がって2人に手を伸ばしてこう言った

「俺達の家族へようこそ！歓迎する!!」

厳しい新人研修

「……………という事です」

『まさか要救助者の日本人2人をそのまま部隊にスカウトするとはな？』

「あー、その件については申し訳無いと思えますけど本人が希望したんだからええじゃないっすか」

『私にも一応話して欲しかったのだが？』

「全く持つて陸将殿の言う通りなので何も言えねえですはい」

きいの特別士官室で狭間陸将と会話する佐藤

クイントラナイトストーカーズはやしまに一時的に収容となった

また、久世達は情報収集に出発しようとしている

『現在の状況は？』

「10式を上陸させます。補給も早めでお願ひします」

『分かっている』

狭間陸将との通信を切った佐藤はきいの訓練室に向かった

ここでは入隊した2人の訓練が行われている

基本的に嵐の入隊は佐藤が決められているので、入隊時に体力が少なかったりしても問題は無い

嵐は他の特殊部隊でも遂行出来ない様な任務に投入されるので体力の多さより特殊な能力が必要とされるのだ

「どうだ絵里」

「なかなかセンスあるわ。特にキリトの近接戦闘はそこら辺の特殊部隊を圧倒できる。アスナの支援があれば勝利は確実でしょうね」

「そうか……ならキリトには剣でも渡そう。2人とも集まれ！」

佐藤が集合をかけると2人は息を切らしながら来た

「座っていいぞ…… お前ら大丈夫か？」

「はあはあ…… 意外とキツイ……」

「運動はある程度していたはずなんだけど…… なんでこんなにキツイの？」

「2人ともなんでキツイと思う？」

佐藤の質問に2人は首を傾げる

「なんでって…… 俺達の体力が少ないからじゃ？」

「違えな。俺の見立てじゃ2人とも体力面は問題無いはずだ。この訓練室には特殊な仕

掛けがあるんだよ」

「仕掛け？」

「そう。明日奈、アスリートがよくやるトレーニングって何だ？特に効果的なやつ」

「高地トレーニングとか？……もしかして！」

「そう。ここの空気はかなり薄くなってる」

きいの訓練室は空気が薄く出来る

これをする事でかなり高度の高い所と同じくらいの空気にできるのだ

「その内慣れるさ。絵里、見本を見せてやれ」

「了解」

絵里がスタートラインに立って軽くストレッチする間、佐藤は葉巻に火をつけ口に運ぶ

「用意出来たわよ」

「よし、目標1分、スタート！」

このコースは2人がやったのと同じ障害物の置かれたコースであり、2人の最高は7分だった

が、絵里は2人の苦戦したコースを難なくクリアしていく

「すげえ……」

「あれでもウチの副隊長なんだ。模擬戦で油断すりゃ俺でも危ねえよ」

「あれでもは余計ねッ!!」

聞こえてしまった余計な言葉をかき消す様に最後の障害物を飛び越しゴールする
タイムは55秒だった

「目標は達成だが凜や穂乃果には及ばなかったな」

「あの二人は猫並の運動神経だからね。45秒はベスト更新しても無理よ」

「せやな。ま、その調子で2人をシゴいてやってくれ」

「分かってるわ。さあ2人共!コース周回再開よ!」

2人がコースに戻ると佐藤と絵里は訓練風景を見ながら今後の話をした

「絵里、アイツらには色々仕込んでやってくれ」

「そこまでやる必要がある?若いのには過酷じゃないかしら?」

「嵐はいずれ止む」

「!」

驚きを込めた視線を佐藤に送る

それを感じ取ったのか続きを話し始めた

「どんなにデカい嵐だつていずれ止むんだ。俺達もその時が来る。そしてその時、その後
後に備えなきゃならない」

「私達の次は彼らだと?」

「隊長副隊長にな。だから色々仕込んでやってくれ。その時が来れば2人の力になってくれるはずさ。頼んだぞ、副隊長」

「……任せなさい、隊長」

笑を浮かべその場を去る佐藤

きい艦内で新人2人の研修が進む中、外でも騒動が起きていた

リヒヤルダと詩織と

新人研修を見終わった佐藤はその足で艦内の部屋へと向かう

ドアの前の乗組員は海上自衛隊と同じ青のデジタル迷彩の服を着ており、パツと見は一般的な護衛艦の乗組員だ

その乗組員が手に自衛隊では採用していないベネリM4を所有している事を除けばの話だが

佐藤を見つけた乗組員は敬礼し、ドアの前から退く

軽く返した佐藤が中へ入るとリヒヤルダが窓の外を見ていた

「調子はどうです?」

「おお、佐藤殿。いや、全く凄いものだな。この小島の様な船を作れる貴国は我々の常識を遥かに超えた技術を持っているのだろう。この部屋とて船の中とは思えない快適さだ」

「まあ、本艦は特別ですからね」

一応捕虜として扱われるリヒヤルダはこの部屋を与えられている

この部屋は本来捕虜の收容部屋等ではなく群司令を始めとする高級将校が使う部屋

を少し変えただけである

この部屋を使うと決断したのは佐藤本人でリヒャルダ相手に敬意を持って接している事の表れである

「この部屋は見た目が優れているだけではありませんよ」

「と、言われると?」

「こう言う事です」

佐藤はポケットからオイルライターを取り出し火を付けて床へ落とした

当然床のカーペットへ燃え広がる………事も無くすぐにライターの火が消えた

「これは………火災対策か?」

「ええ。本艦は艦内の装飾品も全て防火仕様となっております。発生した火種はすぐに消えます。船という物は1度火災が発生すると簡単に沈んでしまいますので」

佐藤の言葉通りで、戦闘艦で発生した火災は適切なダメージコントロールがあっても消火は困難を極める

日米は太平洋戦争で熾烈極まりない海戦を体験しており、共に艦が火災で容易に失われる事を知っていた

だからこそ両国海軍艦艇は他国に例を見ない程徹底した火災対策を取っているのだ
歴史ある英国海軍ですらここまでの対策はしていないし、なんならフォークランド紛

争までは火災を軽く見ていた

しかしこの紛争で英国海軍は火災に苦汁を舐めさせられたのだ

命中したエグゾセが不発だったにも関わらず英海軍のシエフィールドが沈んだのはエグゾセの残燃料が引き起こした火災と高速突入による被害が原因だった

また撃沈こそしなかったもののグラモーガンにも大火災を発生させ大破させたがこの時もエグゾセ自体は不発であった

第二次世界大戦、大戦後を見てわかる通り火災は船の天敵である

リヒャルダについてもそれは共通認識であるようだった

「それは痛い程分かる。我々の船は木で出来ている。佐藤殿達の船以上に火には弱い」

「その通りだと思います。リヒャルダ將軍、共に外に出ては見ませんか？」

「良いのか？ご好意に甘えさせて頂こう」

2人で部屋を出る

艦橋上にある艦橋上部監視所に詩織の許可を取って立ち入る

巨大なきいの最上部からの眺めは壯観であった

「良い眺めだ……我々はこの国を破壊しようと考えれば後悔しかないな……」

「將軍、あなたを国に返す事もできませんが……」

「私は死んだ事にされているさ。今更帰っても歓迎はされないなら、ここに残りたい」

「将軍がそう仰るのなら我々は構いません」

佐藤の隣に佇むリヒャルダの表情は非常に穏やかだった

「佐藤殿」

「どうされました？」

「将軍とは、難しいものだな」

「……………ええ。常に2つの立場の者達に挟まれますから」

「うえ国と部下か。一方を疎かにする事は出来ない」

「そのバランスの取り方が時代とマッチしていれば名将と呼ばれるのだと思います」

「我々は名将と呼ばれるかな？」

「それは我々が決める事ではありませんよ。後の時代を創る者達が決めるのでしよう」

艦内に戻った2人は別れ、佐藤は艦橋に向かった

艦橋に居る詩織に会いに行くのが目的である

「詩織」

「ん？」

「UAVは持ってきてくるか？」

「あるよ。使う？」

「今はいい。が、その内使う事になるかもな」

「目標は帝国軍かな？」

「いや、どっちかかって言うのと内地のクーデター軍だな」

詩織が少し反応を見せる

「……なるほどね。私達を受け入れている事に納得してない内地軍の連中が女王相手にクーデターを起こす可能性はある」

「そうだ。その時に備えなきゃいけないからな」

佐藤が見つめる先には城があつた